

— 新生「上田市」合併記念事業 —

# 古代信濃と東山道諸国の国分寺



上田市立信濃国分寺資料館

— 新生「上田市」合併記念事業 —

# 古代信濃と東山道諸国の国分寺

上田市立信濃国分寺資料館



東大寺出土軒丸瓦6235型式  
(奈良文化財研究所写真提供)



平城京法華寺北側出土軒平瓦6734型式  
(奈良文化財研究所写真提供)



美濃国分寺僧寺跡出土軒瓦  
(岐阜県大垣市教育委員会写真提供)



下野国分寺僧寺跡南階段  
(栃木県下野市教育委員会写真提供)

## はじめに

奈良時代の天平13年（741年）、<sup>しやうむ</sup>聖武天皇の詔（みことり）によって全国60余国に建立された国分寺は、災害、<sup>やくびやう</sup>疫病、<sup>ごこくげうじやう</sup>外敵の除去や五穀豊穡を祈願した、<sup>こっか</sup>国家鎮護の寺院です。国分寺は地方の官寺であり、「国」は各国を示し、「分」は「何々のため」という意味があったとみられ、各国や日本全体を<sup>しず</sup>鎮め<sup>まも</sup>護る祈りが日々行われていました。国分寺では「<sup>こんこうみやうしてんのうごこくのてら</sup>金光明四天王護国寺」と称された国分僧寺と、「<sup>ほつげめつざいのてら</sup>法華滅罪之寺」と称された国分尼寺がセットで建立され、国分僧寺では二十人の僧が、国分尼寺では十人の尼が配置されていました。信濃では、<sup>とうさんどう</sup>東山道が通過していた上田地方に信濃国分寺が建立され、奈良・平安時代の古代信濃における仏教文化の中心となりました。

今回の特別展では、最近確認された信濃国分寺跡出土<sup>のきひらがわら</sup>軒平瓦と同じ型で製作されたとみられる平城京跡の西隆寺付近から出土した軒平瓦や、信濃、美濃、上野、下野などの東山道諸国の国分寺跡から出土した<sup>のきがわら</sup>軒瓦、<sup>おにがわら</sup>鬼瓦、<sup>すずり</sup>硯、<sup>とうじき</sup>陶磁器、<sup>ぼくしょどき</sup>墨書土器、<sup>がとう</sup>瓦塔、文字瓦、建築部材など、当時の国分寺を<sup>しの</sup>偲ぶ貴重な資料を展示いたします。また3月に合併して上田市となった丸子地域の依田地区には、信濃国分寺の建立の際に大量の瓦や須恵器を焼いたと推測される<sup>よだ</sup>依田古窯跡群があり、今回この窯跡から出土した平瓦や須恵器類も展示いたします。

こうした資料を通して、古代信濃と東山道諸国の国分寺や、仏教文化の一端をご理解いただければ幸いに存じます。最後に今回の特別展の開催に際しまして、貴重な資料をご出展いただきました皆様方、ご指導、ご協力を賜りました関係各位、諸機関に対しまして、心より厚くお礼申し上げます。

平成18年9月

上田市立信濃国分寺資料館

## 目 次

「平城京内出土軒瓦と信濃国分寺出土軒瓦」……1	(1) 長野県内の東山道推定路 ……39
「古瓦からみた上野国分寺の造営」 ……13	(2) 上田地方出土の道路状遺構 ……40
I 東山道諸国の国分寺 ……24	2 信濃国分寺跡 ……42
1 東山道と東山道諸国 ……24	(1) 信濃国分寺跡の調査 ……42
(1) 平城京と五畿七道 ……24	(2) 信濃国分寺跡出土軒瓦と平城京跡 西隆寺付近出土軒瓦 ……48
(2) 東山道 ……25	(3) 近年の信濃国分寺僧寺跡の調査 ……51
(3) 東山道の国分寺 ……26	3 依田古窯跡群 ……52
II 遺跡からみた各地の国分寺跡 ……28	特別展関係遺跡・寺院位置図 ……54
1 美濃国分寺跡 ……28	展示資料目録 ……55
2 上野国分寺跡 ……31	引用・参考文献 ……59
3 下野国分寺跡 ……35	
III 古代の信濃と国分寺 ……39	
1 古代信濃と東山道 ……39	

## 例 言

1. 本書は平成18年9月16日(土)から平成18年11月5日(日)までを会期とする特別展「古代信濃と東山道諸国の国分寺」の展示概説として作成した。
2. 本書を作成するにあたり、多くの書籍を参考・引用させていただいた。厚く御礼申し上げる。なお、巻末の引用・参考文献の番号と本文中の文献番号は同一である。
3. 紙面の都合で展示資料のうち図録に掲載できなかった資料がある。
4. 本書の作成は当館職員が行った。なお、解説文の執筆は「平城京内出土軒瓦と信濃国分寺出土軒瓦」が山崎信二氏、「古瓦からみた上野国分寺の造営」が高井佳弘氏、第Ⅱ章1が川上元氏(上田市文化財保護審議会委員)、その他は倉沢正幸(信濃国分寺資料館)が担当した。

## 平城京内出土軒瓦と信濃国分寺出土軒瓦

奈良文化財研究所考古第三研究室長 山崎信二

### (1) はじめに

奈良時代の信濃国分寺の造営で、どの程度の数の瓦が必要だったのでしょうか。信濃国分寺の講堂<sup>きょうだん</sup>の基礎<sup>きそ</sup>の規模が正面34m、側面20mと復原されています。奈良国立文化財研究所が復原した平城宮の朱雀門<sup>すざくもん</sup>の基礎規模は正面32.7m、側面17.7mで、二重目の屋根には平瓦11,288枚、丸瓦5,586枚、軒平瓦376枚、軒丸瓦378枚、面戸瓦320枚、熨斗瓦<sup>のし</sup>2,127枚、鬼瓦8枚、隅木蓋瓦4枚の瓦の合計20,087点の瓦を用いました<sup>1)</sup>が、信濃国分寺の講堂の屋根瓦数もこの朱雀門の二重目の屋根と同じか、それよりやや多い数であったと言えます。

信濃国分寺では講堂の他に、金堂・中門・塔<sup>とう</sup>・僧房<sup>そうぼう</sup>・回廊<sup>かいろう</sup>が検出されているので、これらがすべて瓦葺とすれば国分僧寺だけでも、朱雀門二重目の瓦数の5倍程度、即ち10万枚程度が必要になるということになります。

### (2) 軒瓦の文様

屋根の全体を覆っているのは丸瓦と平瓦で、軒先には文様を付けた軒丸瓦と軒平瓦<sup>のきまるがわら、のきひらがわら</sup>を用います。文様の付け方は、まず木製の板に文様を彫り込んだもの<sup>はんがた</sup>(范型)を用意します。軒丸瓦は、その木製の范型に粘土をつめて円板形の粘土をつくり、丸瓦と接合して完成させます。軒平瓦は幅広の凸型台の上であらかじめ粘土の全形をつくり、横から范型を打ち込んで文様を付けます。

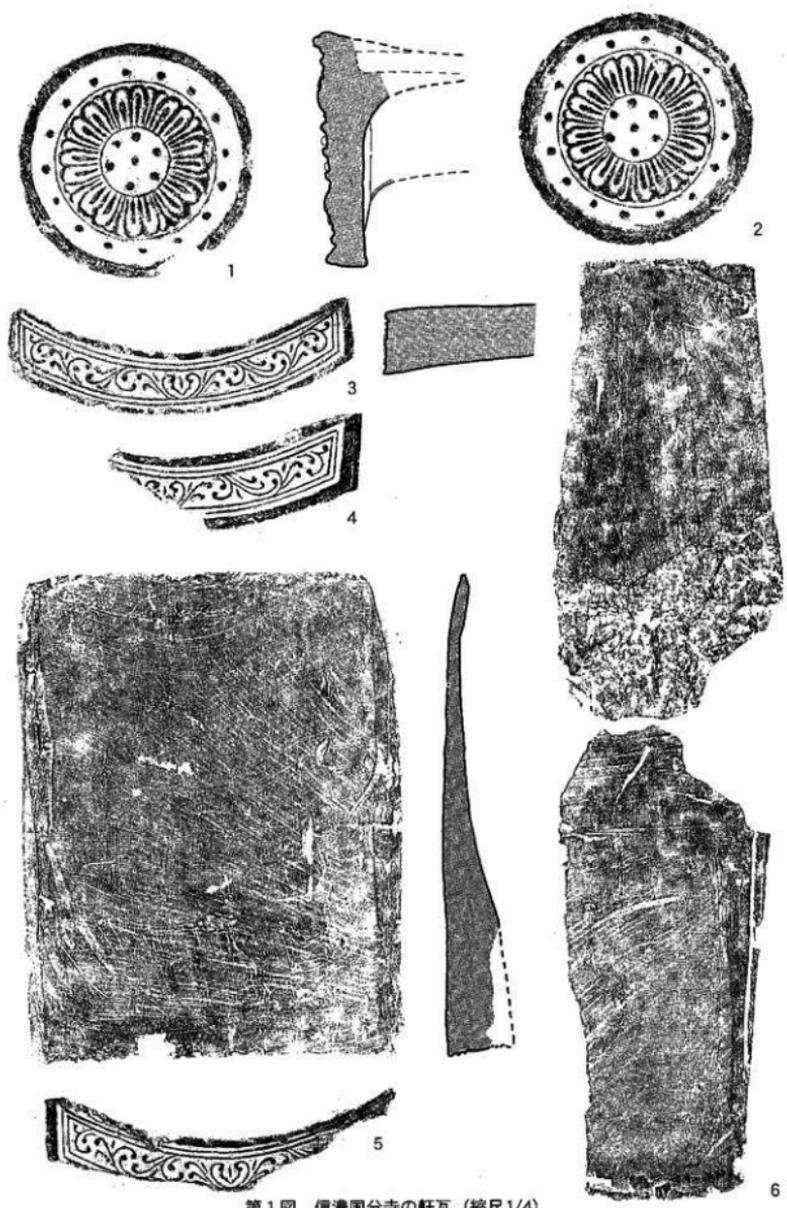
#### ③ 信濃国分寺軒瓦の第一の特徴

信濃国分寺では、奈良時代の軒瓦としては軒丸瓦・軒平瓦とも1種類の文様の范型の瓦しか出土していません。木で出来た范型は、長期に回数も多く使用すればするほど、やわらかい木質の表面は磨耗して木目痕<sup>もくめこん</sup>があらわになり、細かな凹凸が出現します。信濃国分寺では、ほとんどすべての軒瓦が、きれいな文様の表面をしていますから、それほど長期間にわたっての瓦製作は考えられないと思います。即ち信濃国分寺の軒瓦は1種類の軒瓦文様の組み合わせで、比較的まとまった期間の間に瓦が製作されたであろうこと、これが第1の特徴です。

#### ④ 信濃国分寺軒瓦の第二の特徴

信濃国分寺の軒瓦の文様は、瓦の研究者が「東大寺式」<sup>2)</sup>と呼ぶグループに近いものです。これが第2の特徴となります。

東大寺は745年聖武天皇により創建され、751年に大仏殿が完成し、翌年開眼供養を行った有名な寺です。この東大寺では軒丸瓦として6235型式D・E・F・G・K・Mが出土し、軒平瓦として6732型式D・F・G・H・I・J・V・Wの文様をもつものが発掘で出土しています。



第1図 信濃国分寺の軒瓦 (縮尺1/4)

ここで、型式番号4桁と、アルファベットの説明をしなければなりません。軒丸瓦6235型式における6は奈良時代の軒瓦の意味です。残り3桁の数字では200～369までを複弁蓮華文とし、外区に珠文だけを配する軒丸瓦を珠文縁として、230～259の番号を付けています。さらに、6235型式という東大寺式軒丸瓦の文様をもつものは、(i) 複弁蓮華文で8弁をもつこと、(ii) 外区内縁に珠文を配し、珠文数は16個が多い(12種中10種)、(iii) 外区外縁は素文で傾斜縁である、(iv) 間弁は独立する、(v) 中房の蓮子数が1+6をもつものが多い(14種中11種)という5つの条件を満たしていれば、典型的な6235型式ということになります。

一方、軒平瓦の6732型式とは、軒丸瓦と同じく6は奈良時代の軒瓦の意味です。残り3桁の数字では、東大寺式と呼ぶものは730～733の番号を付けており、中心飾り上部に対葉花文を付けたものです。さらに、中心飾り下部に上開きの三葉文を付け、文様が整っているものを6732型式と呼びます。これが東大寺式軒平瓦の文様の特徴です。

一方、信濃国分寺の軒平瓦は6734型式の中に入ります。6734の文様では、中心飾りは三葉の花文と上に巻く唐草とで構成され、瓦全体の文様では左右に唐草文が展開し、外区に簡縁を配しています。

つまり軒瓦全体としては、信濃国分寺の軒丸瓦は東大寺式6235型式の典型例ですが、軒平瓦は東大寺式6730～6733の典型例ではなく、6734型式の中に入ります。ただし、左右の唐草文の構成は非常によく似ているので、東大寺式6732・6733と隣合わせに信濃国分寺の6734型式がおかれているのです。

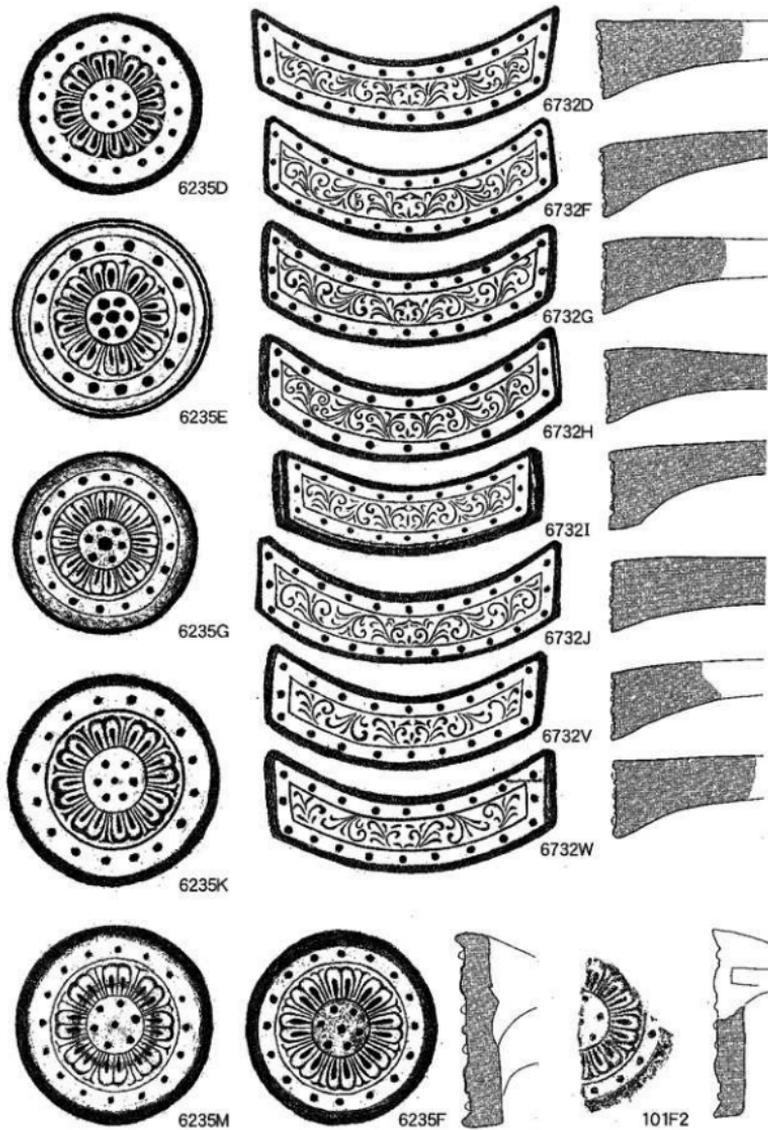
以上からみると、文様的には東大寺式のグループに入れてよい文様ですが、微妙にズレる部分があるということ、これが信濃国分寺軒瓦の第2の特徴となります。

#### ◎ 信濃国分寺軒瓦の第三の特徴

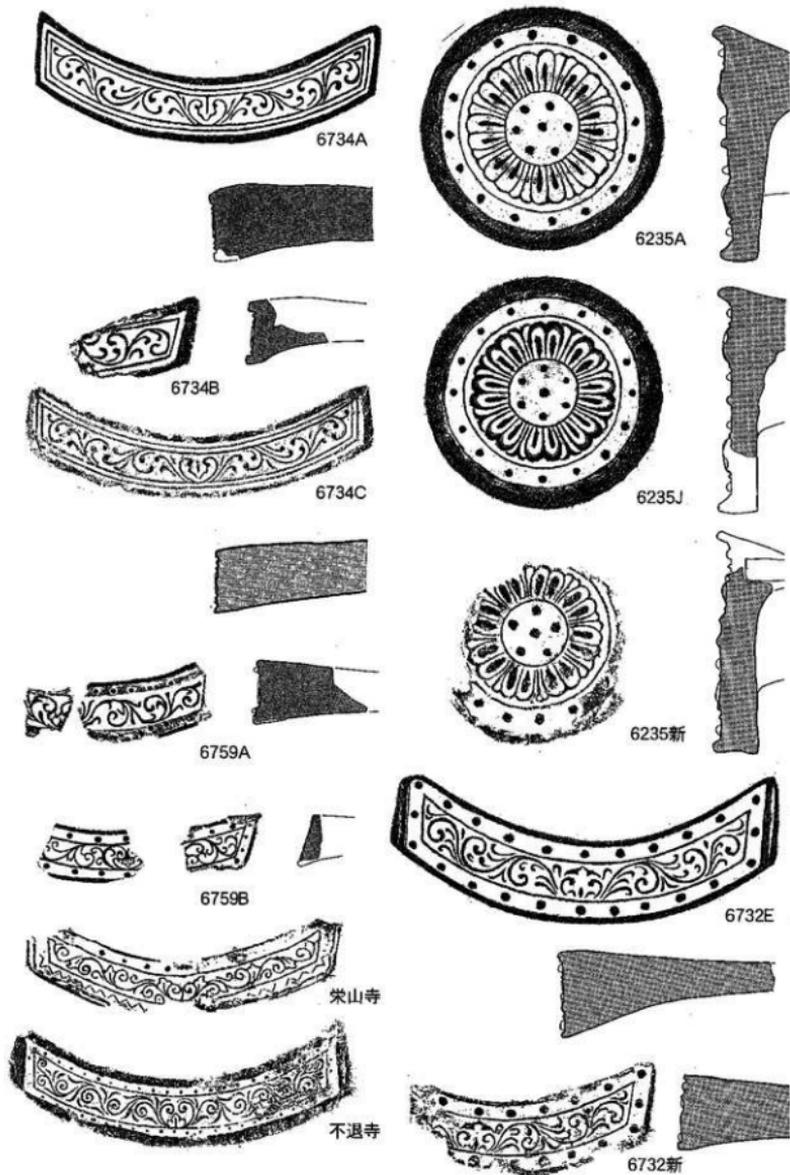
信濃国分寺の軒丸瓦の文様は東大寺式軒丸瓦ですが、細かく分類すると、東大寺出土の「東大寺式軒丸瓦」よりは、興福寺出土の「東大寺式軒丸瓦」<sup>(2)</sup>に近い文様となっています。これが第3の特徴です。

興福寺は奈良市の現在の地に藤原不比等が8世紀初頭に建てた藤原氏の寺院で、8世紀には官寺的な性格を有した大寺です。天平勝宝八年(756)の古文書には、道東大寺司が興福寺に3万枚の瓦の製作を依頼したことがみられ、興福寺出土の「東大寺式軒丸瓦」は、これ以降の年代と考えてよいでしょう。

さて、東大寺出土の東大寺式軒丸瓦は6235型式D・E・F・G・K・Mであるのに対し、興福寺出土の東大寺式軒丸瓦は6235A・J・新の三種です。東大寺出土例では、外区の珠文と中房の蓮子の珠文はすべて大きく、興福寺出土例では珠文は小さい。信濃国分寺の軒丸瓦の外区の珠文と中房の蓮子の珠文は、興福寺出土例と同じように小さい珠文が特徴です。



第2図 東大寺出土の東大寺式軒瓦 (縮尺1/5)



第3図 花文唐草文軒平瓦(左)と興福寺の東大寺式軒瓦(右)(縮尺1/4)

#### ④ 信濃国分寺軒瓦の第四の特徴

信濃国分寺の軒平瓦文様6734型式は、中心飾りは三葉の花文と上に巻く唐草とで構成されていると説明しました。この中心飾りに三葉の花文をもつ平城宮・京出土の軒平瓦は他に6759型式があり、類似の三葉の花文を多用するのは大和柴山寺にあります。

柴山寺創立は藤原良継の死去である宝亀<sup>ほうき</sup>八年(777)以降という田村吉永氏の考え<sup>(3)</sup>に従えば、ほぼこの頃にこれらの花文系列の軒平瓦があるのではないかと思います。なお、中心飾り花文軒平瓦の中では、6734型式軒平瓦が最も古いでしょう。まず、信濃国分寺軒平瓦6734型式の一群があらわれ、次いで平城京出土6759型式の一群と柴山寺出土軒平瓦の一群が出現するという順になり、いずれも文様的には奈良時代末と考えられます。

つまり、花文という軒平瓦の文様構成から奈良時代末と考えた方がよいのではないかというのが第4の特徴となります。

なお東大寺式軒平瓦の編年では、東大寺出土6732F・G・Jと興福寺出土6732Eを750年代に置き、東大寺出土6732D・Hと西大寺出土6732M・N・K・Rを760年代に置き、東大寺出土6732I・V・Wは770年代から80年代にあると一般的に考えられています。

#### ⑤ 信濃国分寺軒瓦の第五の特徴

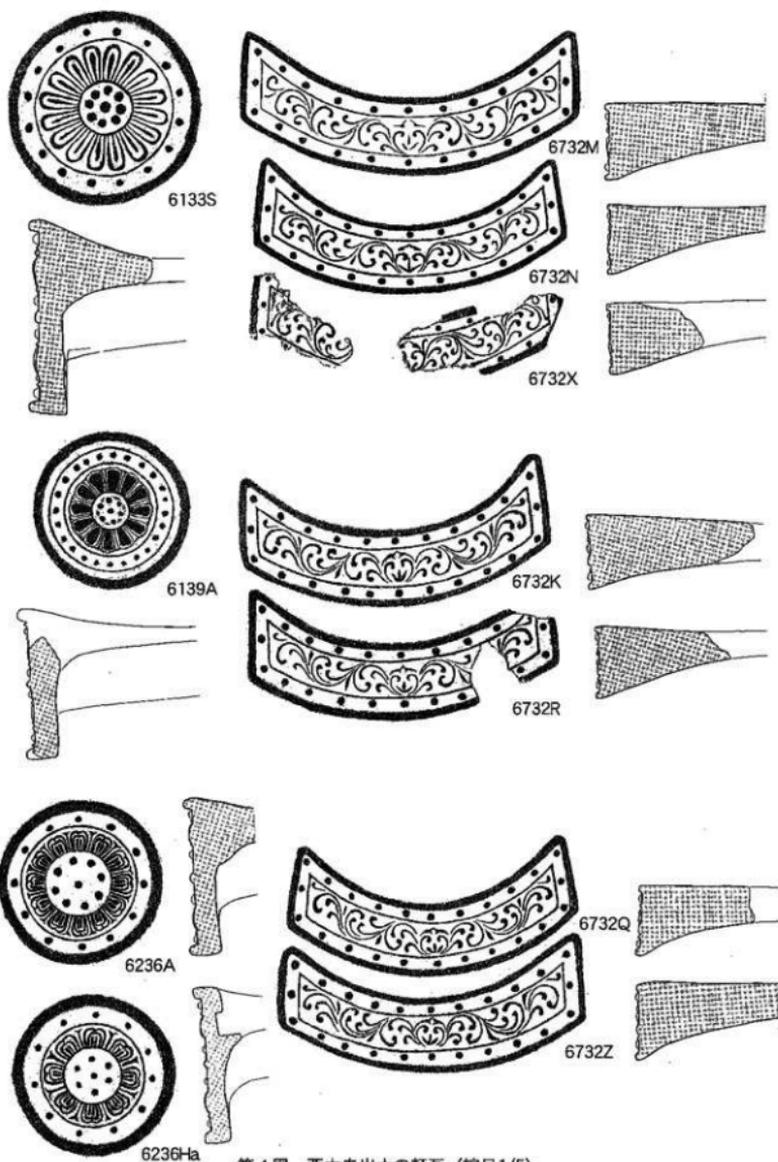
信濃国分寺軒平瓦は平城京出土軒平瓦6734型式C種と同范<sup>どうはん</sup>であることが判明しました。これが第五の特徴です。平城京出土例は、2003年11月の奈良市教育委員会による平城京右京二条二坊十六坪の奈良市西大寺国見町1丁目2137-85-66番地(奈良市504次調査)の発掘調査で出土しました。同范を確認したのは2006年5月のことで、奈良市教育委員会の中井公・宮崎正裕・原田憲二郎の各氏によって確認されました。三名の瓦研究者は、上田市立信濃国分寺資料館に平城京出土の軒平瓦を持参して両者を現物どおしで対比して同范を確認したのです。

平城京出土例の文様の残る部分が4割程度しかなく、明瞭な范傷もないので100%間違いないと断言はできませんが、残っている部分の微妙な続き具合や文様細部の対比からは、90%以上同范は確実と言えるでしょう。なお、6734型式A種・B種については、平城京内で散発的に出土するだけで、集中的に出土する場所は今のところ確認出来ていません。

### (3) 軒瓦の製作技法

瓦の文様だけでなく、瓦の製作技法(作り方)を追求することによって、瓦の年代や瓦工の系譜そして瓦工派遣の有無などを検討することができます。

例えば表面上はよく似た瓦でも、各時代にしかみられない製作法で作られていれば、作られた年代を特定できます。また、同時代の瓦でも、二つの異なった製作法で作られていれば、Aグループの瓦工の製品であるか、Bグループの瓦工の製品であるかが判明し、瓦生産の実態に少しでも近づくことができます。



第4図 西大寺出土の軒瓦 (縮尺1/5)

また瓦の文様だけでなく、瓦の製作技法が同じという場合は、瓦が移動したのか、瓦工が遠い場所出張して瓦を製作したのか、瓦工が移動しなくても同じ製作技法が出現するのか、などの問題を考えることができます。以下、東大寺式軒瓦と信濃国分寺出土軒瓦との製作技法について考えてみましょう。

#### ④ 東大寺式軒平瓦の製作法

平城宮出土の軒平瓦には平瓦部凹面に布目と共に糸切痕いときりこんが残り、平瓦部凸面には縄叩きの痕跡なわたたが残るものが一番多い。これは、粘土素材を糸切りでスライスし、凸型台の上に粘土板を置き、補足粘土を加えて、ほぼ軒平瓦の形にし、上から縄叩き板で叩き締めて全形を仕上げる方法です。ただし、凸面を縄叩きの後、タテケズリを行なう軒平瓦の数も、かなりあります。これらをすべて含んで、「糸切り素材・縄叩き全形仕上げ法」（Aグループ）とも呼んでおきましょう。

一方、東大寺出土の「東大寺式軒平瓦」（6732D・F・G・H・I・J・V・W）や、西大寺出土の「東大寺式軒平瓦」（6732K・M・N・Q・R・X・Z）では、平瓦部凹面には布目だけで糸切痕は全くなく、平瓦部凸面では縄叩き痕がなく、代りに布目が残りタテケズリで仕上げている。そして一枚の布の庄痕が凹面～狭端面～凸面に連続しており、成形台の片端は型枠状を呈していると考えられる。

さらに粘土素材の用意の仕方は、粘土をブロック状または板状に手でのぼし、途中で押しつけ、粘土を順次加えていく。最後の成形は、縄叩きや叩き板を用いることなく、板状工具を縦方向に動かし粘土を削り、粘土を締めて、成形するものです。これを「粘土ブロック素材・削り粘土締め全形仕上げ法」（Bグループ）とも呼んでみましょう。

東大寺式軒平瓦の製作技法をそれぞれ出土地別にみると、東大寺出土のもの、西大寺出土のものはBグループの成形法ですが、平城宮出土の「東大寺式軒平瓦」（6732A・C・O・L）は、典型的なAグループの成形法で、タテケズリも全く行っていません。

一方興福寺の「東大寺式軒平瓦」（6732E・新）は、平瓦部凹面に糸切痕を残し、平瓦部凸面に縄叩き痕とタテケズリを残すのでAグループの成形法です。ただし、完形の軒平瓦がまだ発見されていないので、平瓦部狭端面に布目が残る可能性は残ります。

文様は東大寺式軒平瓦とは異なりますが、薬師寺出土の6763Bでは、平瓦部凹面に布目と糸切痕が残り、平瓦部凹面の布目は平瓦部狭端面まで連続しています。これは凸型台の狭端部の形状が「立ち上がりをもつ型枠状を呈していた」ことを示すもので、この点では東大寺や西大寺出土の「東大寺式軒平瓦」と一部共通するといえます。

このように薬師寺6763Bは、Aグループの変種とも言うべきものですが、興福寺の「東大寺式軒平瓦」が、今のところ、Aグループの典型なのか、6763Bと同じAグループの変種なのかはよくわかりません。

#### ⑥ 花文唐草文軒平瓦の製作法

信濃国分寺出土軒平瓦は、平城京出土6734型式C種と同範ですが、この花文唐草文軒平瓦6734A・B・Cの平城京出土例での製作技法をみておきましょう。

平城京での出土例は、いずれも数が少なく、破片なので詳しいことがわかりません。

まず、6734Aでは平瓦部凹面は布目だけで糸切痕は認められず、平瓦部凸面はタテケズリのみ部分が残存しています。6734Cでは、平瓦部凹面は布目だけで糸切痕は認められず、瓦当よりをヨコケズリしている。平瓦部凸面はタテケズリのみ部分が残存しています。

以上からみると、平城京出土の花文軒平瓦は資料不足で、現在の資料からみると、AグループかBグループかの分類すら、困難な状況にあります。

#### ⑦ 信濃国分寺出土軒平瓦の製作法

私は1993年7月に、上田市立信濃国分寺資料館を訪問したことがあり、軒平瓦については、次のような観察をおこなっています。<sup>40</sup>

「軒平瓦の製作技法については、信濃国分寺出土の50例以上を検討したが、叩き板の痕跡をもつものは全くなく、いずれも平瓦部凸面は縦方向の削り調整によって仕上げられており、堀川神社裏出土品（第1図5）では丹念に削り過ぎたため平瓦部狭端に近い部分では1cm程度の薄さとなっており、「30」と番号付ける軒平瓦（第1図4）では平瓦部凸面に布目を残し、また平瓦部凹面から狭端面まで連続して布目を残す例（第1図6）がある。以上からみて、信濃国分寺出土軒平瓦は東大寺出土の東大寺式軒平瓦と技法的に同一と言ってよい。」<sup>40</sup>

ところが、以上の観察は、部分的ではあるが、かなり重要な誤りがあるのではないかと「東大寺式軒瓦について」の論考（2003年）を書いた後、思い続けていたのです。それは、第1図5および6の平瓦部凹面には糸切痕があるのではないかと、という点です。この点は再度、2006年10月15日に上田市立信濃国分寺資料館を訪問する際に確認したいと思っているのですが、以下では糸切痕があるという前提のもとで議論していきましょう。

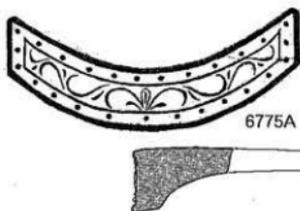
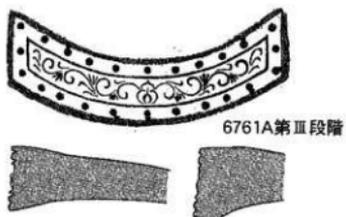
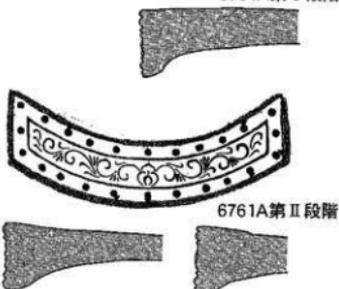
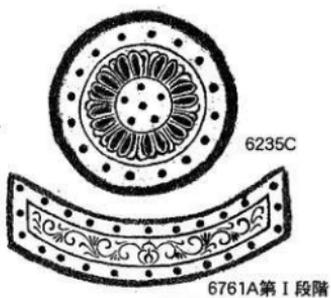
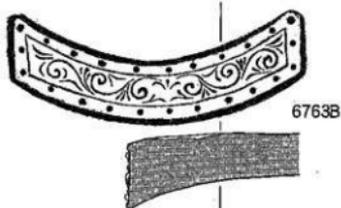
この場合は、粘土素材を糸切りでスライスし、凸型台の上に粘土板を置き、補足粘土を加えて、ほぼ軒平瓦の形にし（ここまではAグループの製作法と同じ）、凸型台（成形台）の片端は型枠状を呈し、叩き板を全く用いることなく、板状工具を縦方向に動かしか粘土を削り、粘土を締めて成形する（後半はBグループの製作法と同じ）ものとなります。

ここにAともBとも異なる第三の製作法が提示されます。これを「糸切り素材・削り粘土締め全形仕上げ法」（Cグループ）と呼んでおきましょう。

それでは、このCグループの製作法を示す軒平瓦は平城京内では全くないのでしょうか。

#### ⑧ 西隆寺出土軒平瓦6761Aの製作法

西隆寺は称徳天皇の767年に、西大寺に2年遅れて、西大寺（僧寺）に対する尼寺として、国家によって造営が始められたものです。西隆寺出土の軒平瓦で6761Aが最も数が多く、軒平瓦



第 5 图 6763B 与西隆寺軒瓦

の約半数を占めています。<sup>(5)</sup>

この6761Aは、瓦当文様での**范傷**進行から第Ⅰ段階→第Ⅱ段階→第Ⅲ段階への変化が指摘されています。<sup>(6)</sup>まず、第Ⅰ段階では平瓦部凹面に糸切痕を残し、平瓦部凸面に縄叩き痕を残しており、「糸切り素材・縄叩き全形仕上げ法」(Aグループ)の技法を示しています。次に、第Ⅱ段階の個体の一部に「わずかにタテの縄叩きを残す例が存在し」、「この狭端面には、凹面から連続する布目残り」、かつ凹面に糸切痕が残っています。これはAグループ技法の変種としてよい。

さらに第Ⅲ段階では完形の軒平瓦があり、平瓦部凹面には糸切痕が残り、平瓦部凸面には全面に縦方向のヘラケズリが施されており、叩き痕跡を残す例はなく、また凹面から狭端面にかけて連続する布目を残しています。また、瓦全体が**磨耗**しているため、范傷進行の段階は不明ですが、6761Aの中に平瓦部凸面に布目痕を広範囲に残す例があります。以上からみると、6761A第Ⅲ段階の軒平瓦は「糸切り素材・削り粘土締め全形仕上げ法」(Cグループ)ではないかと思えます。

#### (4) 同范瓦出現の様相とその背景

全国の国分寺で、平城京内と同范の軒瓦を用いる寺院は、ほとんど存在しないのです。その点では、信濃国分寺はきわめて特殊な例であるといえます。

##### ㊤ 平城京内での6734Cの出土地点

平城京で6734Cが出土したのは、平城京右京二条二坊十六坪で、西隆寺の寺地よりさらに三坪分南の位置にあたります。この6734Cは井戸から出土しており、同じ井戸から他に多くの軒平瓦が出土し、それはすべて西隆寺所用瓦であるという(奈良市教育委員会の教示による)。

西隆寺地内のこれまでの調査では、6734Aの破片が1点出土しただけで、6734Cの出土はないけれども、将来的には出土する可能性はあるとみてよいだろう。

##### ㊤ 信濃国分寺6734Cの製作年代

西隆寺の創建は、続日本紀神護景雲元年(767)八月に、従四位上伊勢朝臣老人を造西隆寺長官に為すとあり、この頃造営が開始されたと考えられます。しかし、宝龜二年(771)八月には西隆寺等に寺印を頒たれたことがみえ、すでに寺としての様相をほぼ整えていたとみられています。

この4年間を、西隆寺で最も出土量の多い軒平瓦6761Aにあてはめるなら、Ⅰ段階(A技法)・Ⅱ段階(A技法変種)が767年から769年まで、Ⅲ段階(C技法)を769年から771年頃までと位置付けることができよう。もし、「造西隆寺」の役所に属する瓦工の一部が、信濃国分寺へ派遣されてC技法を出現させたとすれば、それは神護景雲三年(769)以降という年代が設定できるだろう。

##### ㊤ 信濃国分寺の造営

文献上から信濃国分寺の造営年代を示すものはなにもない。ただ、続日本紀神護景雲三年(769)には、八月十九日に「従五位上弓削宿禰大成を信濃員外介」とし、九月十七日に「従四

位下藤原朝臣楓麿を信濃守（公卿補任は七月）としている。和銅から神護景雲二年まで、これまでの信濃守・介は従五位下のみである。（12例ある<sup>(7)</sup>）のに対し、神護景雲三年のみ上位の官人二人をあてているのは、なにか特別な事情が存在するとみてよいのではないだろうか。

そして信濃員外介である弓削宿禰大成は、正倉院文書の東大寺「充厨子彩色帳」にある「第一厨子、花嚴宗、充弓削大成」と同一人物かと指摘されており、画師の可能性が高いのである。

また「従四位下」藤原朝臣楓麿は、神護景雲元年（767）正月、押勝の乱の論功に勲四等を授けられており、その後の称徳天皇・道鏡ラインの主導する「太師誅せられてより、道鏡はかりことをほしきままにし、軽しく力役を興し、務めて伽藍をつくらふ」動きの中に、配下としていたであろうし、信濃国分寺完成に深くかかわったものとみてよいだろう。

もちろん、道鏡の「伽藍」とは西大寺・西隆寺・法華寺・弓削寺等の造営であり、信濃国分寺がこれに入っているとは言えない。しかし、信濃国分寺の造営・完成が西大寺や西隆寺と同じく、道鏡の全盛期（765～770）になされた可能性はきわめて高いように思われる。

元来国分寺造営は国府造営と同じく、原則的に国家地方財政によってまかなわれるべきものであり、その造営の財政的基礎は、自国からあがる稲の収入の一部を割いたのであり、国分寺の造瓦においても自国に在住する瓦工を動員して使用する場合が圧倒的に多いのである。ところが、信濃国分寺では「造西隆寺」の役所に属する瓦工の一部を派遣して造瓦を行った可能性があり、きわめて特殊な事情のもとでの造瓦と考えてよいだろう。

#### 【註】

- (1) 文化財建造物保存技術協会『平城宮朱雀門復原工事の記録』1999年3月
- (2) 山崎信二「東大寺式軒瓦について」『古代瓦と横穴式石室の研究』（同成社）2003年11月
- (3) 田村吉永「崇山寺の草創と延喜式阿陀墓に就いて」『大和志』6-1、1939年1月
- (4) 山崎信二『平城宮・京と同范の軒瓦および平城宮式軒瓦に関する基礎的考察』1993年度文部省科学研究費一般研究C印刷、1994年3月（『古代瓦と横穴式石室の研究』に所収）
- (5) 奈良国立文化財研究所『西隆寺発掘調査報告書』（奈文研学報第52冊）1993年3月
- (6) 小沢毅「西隆寺創建期の軒瓦」『西隆寺発掘調査報告書』1993年3月
- (7) 宮崎康充『国司補任第一』1989年6月 続群書類従完成会

# 古瓦からみた上野国分寺の造営

群馬県埋蔵文化財調査事業団主任調査研究員 高井佳弘

## はじめに

上野国分寺の遺跡は、前橋市街地の西方約4キロ、高崎市引間町・東国分町、前橋市元総社町にまたがったところにある。僧寺と尼寺が300mほど離れて東西に並び、現在はその中間を関越自動車道が通っている。僧寺は、史跡整備事業に伴う発掘調査が昭和55年（1980）から9年間群馬県教育委員会によって行われ、その調査結果は『史跡上野国分寺跡発掘調査報告書』（群馬県教育委員会・1988、以下、本書を引用する場合は『報告書』と略す）によって報告されている。調査によって確認された遺構の配置は図1のようで、南大門・中門・金堂・講堂が南北に一直線に並び、中門から発した回廊は四角い空間を作って金堂に取り付き、塔はその外の西側にあるという伽藍配置であることが確認された。これらの伽藍は1辺220～230mの築垣によって囲まれ、これが国分寺の中心部となっている。その他、寺院の管理・運営施設は北側の現在集落となった部分にあるものと考えられる。実際には遺構の残りはかなり悪く、建物規模などが判明し、瓦などの遺物が多く出土したのは塔、金堂、南大門だけであり、中門、回廊、講堂などは全く消滅していたか、あるいは痕跡程度の残存度であったが、以上の結果に基づいて創建期の伽藍の姿を復元したものが、図2の想像図である。現在は史跡整備事業が途中の段階で、現地には塔・金堂の基壇と南辺築垣が復元されているほか、出土品などを展示するガイダンス施設が建設されている。

以上のような発掘調査の成果の他にも、上野国分寺には『上野国交替実録帳』といった文字資料なども残っていて、取り上げるべきことが多いが、ここでは出土した古瓦の概要を紹介し、そこから伺える上野国分寺造営の様子やその特徴について触れることにする。

## 1 出土した軒瓦の概要

9年間にも及ぶ上野国分僧寺（以下「国分寺」と略す）の発掘調査では、整理用コンテナ4000箱もの遺物が出土しているが、そのうちのほとんどを占めるのは瓦である。古瓦はそれ自体は地味な存在であるが、文献資料が少なく、その他の遺物があまり出土しない地方寺院の遺跡にとっては、その歴史を語るほとんど唯一の貴重な資料であり、重要な研究対象である。

しかし残念ながら、国分寺から出土した膨大な瓦片のうち、整理作業が行われたのは軒丸瓦・軒平瓦といった軒先の瓦と、鬼瓦、文字瓦だけである。出土瓦の大部分を占める丸瓦・平瓦は、数が多すぎることが障害となって、ほとんど手が付けられていない。『報告書』作成時には、合計4,000点近い軒瓦と、約1,600点の文字瓦の整理作業で手一杯であり、丸・平瓦の整理はほとんど不可能であった。そのため上野国分寺の瓦の研究は、近年になっても、軒瓦、文字瓦を中心として進められているのが現状である。

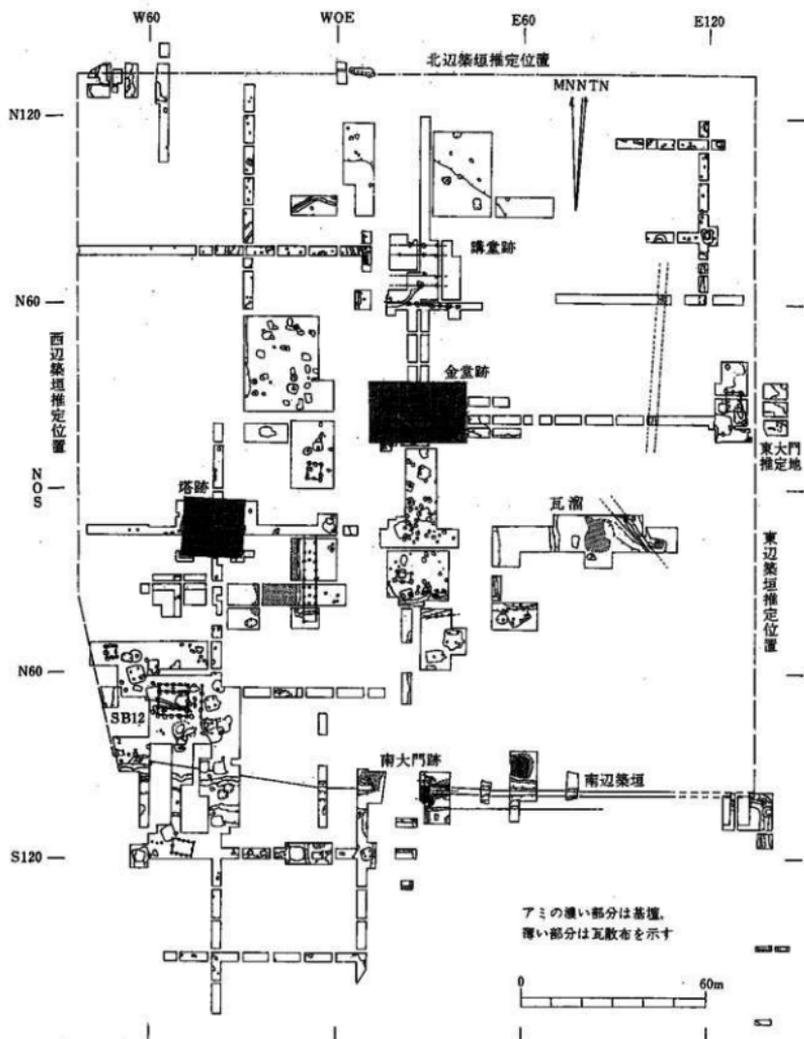


図1 上野国分寺跡遺構配置図

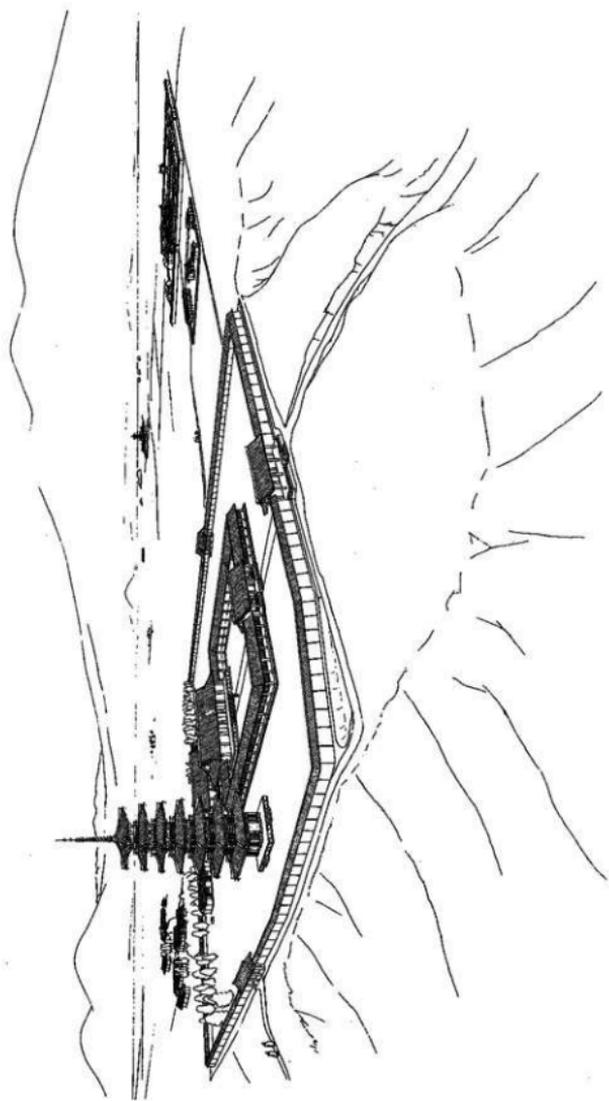


図2 創建された上野国分寺の想像図

まず軒瓦、すなわち、軒丸瓦・軒平瓦についてみてみよう。

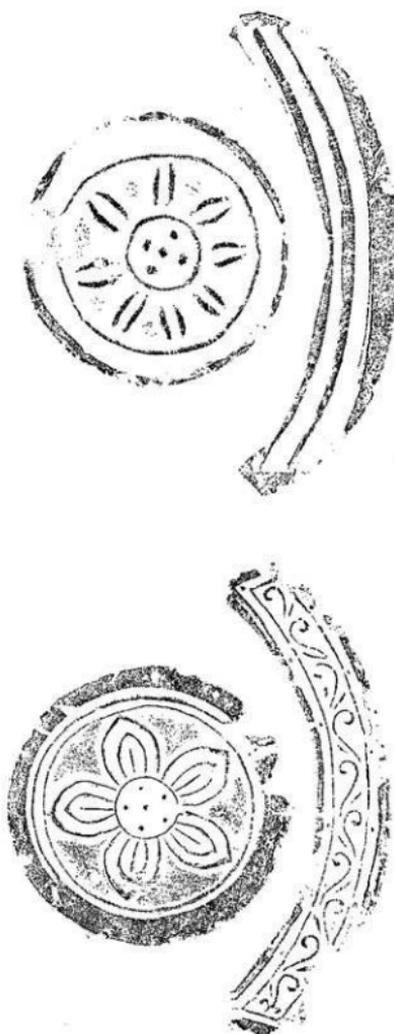
上野国分寺に使われた軒瓦を見渡してみても最初に気づくのは、その種類の豊富さであろう。軒瓦は軒丸瓦・軒平瓦ともに2,000点前後が出土したが、それらを整理した結果、『報告書』作成時点で確認できた<sup>はた</sup>の種類の、軒丸瓦で77、軒平瓦で85もあった。さらに表採資料のみで知られている<sup>はた</sup>の種も少なからずあるので、それらを加えれば軒丸瓦・軒平瓦ともに100種類を越えることは確実であるとみられる。これは武蔵国分寺には及ばないものの、全国で最多の部類に入る数である。それらの文様は非常にバラエティーに富み、技法もいろいろなのが使われている。もちろんこの多種類の瓦は、国分寺創建から廃絶までの200～300年間に使われたものの合計であって、一時期に作られたものではないが、最終段階の国分寺の屋根にはそれほど多くの種類の瓦が葺かれていたのである。この豊富さのために上野国分寺の出土瓦は多くの研究テーマを提供してくれるのであるが、また逆に、あまりの豊富さが<sup>た</sup>仇となって全体像の把握が難しく、瓦の時期判定が困難で、その歴史を明らかにするのは容易ではないという側面ももっている。

これら多種類の瓦はごく大まかに分けて3つの時期に分類することができる。まずⅠ期は国分寺創建以前の瓦である。これには7世紀後半の太田市寺井廃寺の同<sup>どうはんがわら</sup>瓦などが含まれる。このように古い瓦が出土すると、前身寺院の存在を考慮してしまいたくなるが、この時期の瓦は非常に少なく、一つの建物を想定できるほどの数は出土しない。おそらく上野国内の各寺院にストックされていた瓦が、国分寺創建にあたって運び込まれたものと考えられる。

Ⅱ期は国分寺創建期であるが、その中は3つに分けることができる。まずⅡ-1期は、国分寺創建以前から上野国内で生産が行われ、創建開始時点には生産が<sup>かわらがま</sup>継続中であった瓦窯の製品である。それらの瓦窯はもともと地元の寺院に瓦を供給するために操業していたのだが、この時に新たな供給先として国分寺を加えたのである。しかしこれは数量的には少なく、まだ大量生産に対応できていない状況が見取れる。

次のⅡ-2期は国分寺向けに大量生産が開始された時期の瓦である。この時期の瓦は図3に見るような2種類の組み合わせである。この2種類は国分寺での出土量が最も多く、国分寺創建の中心となった瓦である。産地は左・Aが笠懸窯跡群（新田郡笠懸町＝現みどり市）、右・Bが吉井・藤岡窯跡群（多野郡吉井町、藤岡市）であり、いずれも東毛・西毛を代表する瓦の生産地である（図4）。この2カ所の生産地が、その後国分寺の修造期に至るまで、瓦生産の中心的な役割を果たすのである。続くⅡ-3期は、国分寺に向けての瓦生産が広がりを見せる時期であり、Ⅱ-2期の瓦の系譜を引く瓦が生産され、供給される。この時期の瓦は種類は多いものの、それぞれの出土数はⅡ-2期ほど多くはない。

Ⅲ期は修造期の瓦である。この時期の瓦は種類が多く、文様もバラエティーに富んでいる。あまりに多様性があるため、全体を見通した詳細な編年は困難で、瓦の変遷には不明な点が多い。



B. 越前高麗瓦屋・井桁

A. 笠懸瓦葺

図3 創建期の軒瓦



図4 上野国の瓦窯の分布

## 2 文字瓦の概要

文字瓦も多様性に富んでいる。文字の記し方には大別してヘラ書きと押印とがあるが、いずれも一文字のものが多く、特にヘラ書きのものは何を意味するのか分からないものが大部分である。それらのうちある程度のグループをなし、生産時期・生産地などが限定できるものは、次のⅠ類からⅣ類までの4組である(図5)。

Ⅰ類は平瓦の凹面隅部に「二」「三」「大」とヘラ書きしたものである。これらは国分寺創建期(Ⅱ-2期)に笠懸窯跡群で生産されていたもので、図3Aの軒瓦に伴っている。文字の意味するところは不明である。

Ⅱ類は押印の文字瓦で、「勢」「勢作」「佐」「佐位」「雀」「測」「山田」「菌田」など、勢多郡・佐位郡・山田郡という中・東毛諸郡の郡・郷名が記されたものである。押印とはいっても、文字だけの小さなスタンプによるもの、叩き板に格子叩き目とともに文字を彫り込んでいるものなどがある。創建期の後半(Ⅱ-3期)から修造期(Ⅲ期)の前半にかけて笠懸窯跡群で生産されて

いたものである。

Ⅲ類は「當」という字を四角で囲ったもので、それにへら書きの文字が付け加えられる場合があるものである。創建期の後半（Ⅱ－3期）に吉井・藤岡窯跡群の藤岡市側にある金山瓦窯とその周辺で生産されていた。「當」とへら書き文字の意味は不明である。

Ⅳ類は「山字物部子成」などのように、多胡郡の郷名＋人名をへら書きしたものである。文字数は省略されたものも多く、「山浄麻呂」「八伴氏成」「武鯨」なども同類である。その他、「山」「八」「大」など、郷名の頭文字と思われるものも同時期のものであろう。9世紀後半を中心とした修造期（Ⅲ期）のもので、生産瓦窯は滝ノ前瓦窯など、吉井・藤岡窯跡群の吉井町側である。

これら4グループの文字瓦がⅡ－2期からⅢ期にかけて、やはり東西の2大産地で作られているのである。実はこれらに分類できない、1、2文字の文字瓦の方が多いのであるが、それらは文字の少なさが災いして、意味内容・時期を特定することが非常に困難であり、現在までのところ、ごく一部のものを除いて研究が進んでいないのが実態である。

### 3 上野国の瓦生産の特徴

出土した軒瓦、文字瓦の概要は以上の通りであるが、次はそこから上野国の特徴を見てみよう。

国分寺創建の最初期（Ⅱ－1期）に、それ以前から操業が続いていた瓦窯の製品が運び込まれることは、下野国でも例がある。しかし8世紀前半という時期は、上野国では瓦生産が低調な時期に当たっている。この頃の瓦工房では国分寺向けの大量生産にはとても対応できなかったであろう。

そこで上野国では、<sup>急遽</sup>瓦生産体制の再編成に当たったものと思われる。その結果、国分寺向けの大量生産が開始される（Ⅱ－2期）が、おもしろいことに上野国では、国の東西に設けた2カ所の瓦窯群（東＝笠懸窯跡群、西＝吉井・藤岡窯跡群）で、全く違う瓦を生産させるのである。図3の2種類の組み合わせは文様が一目見て違うが、実は作り方も全く違う。瓦の製作技法については煩雑になるので詳細は省略したいが、Bの吉井・藤岡窯跡群のものは以前から上野国に存在した技法で作られているのに対して、Aの笠懸窯跡群のものはこの時上野国に初めて導入された、最新の技法で作られている。このような最新の技法は、国分寺創建にあたって中央政府が全国的に伝えさせたものであると思われ、とすれば笠懸窯跡群の方がより中央政府・上野国の管理に近い、主流の瓦生産であったといえるが、上野の国にはもう一つ、主流とは呼べないが有力な瓦の生産地＝吉井・藤岡窯跡群が併存していたわけである。そして生産された瓦を見る限り、両者は様相が全く異なり、緊密な連携を取っていた形跡が見られないのである。これは考えれば奇妙なことである。国分寺という一つの寺院を作るにあたって瓦生産体制を整備したのであれば、ある程度統一的な基準があったのではないかと考えるのが普通であろう。ところが、実際に国分寺に運び込まれた瓦には、そのような基準を見出すことはできないのである。このように瓦の中

I類



「三」

II類



「勢」



「佐」



「大」

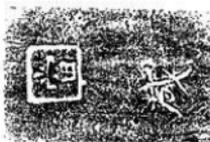


「佐」



「山田」

III類



「成」



「大」

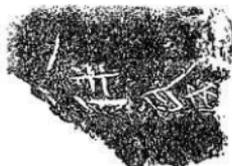
IV類



「山字物マ子成」



「山字麻呂」



「八伴氏成」

図5 上野國分寺に關わる文字瓦

に統一的な基準を見いだせないところが、上野国分寺の特徴の一つである。そもそも100はんしゅ范種を越えるような文様があること自体、基準の存在を否定しているといえる。

これらの瓦の生産体制については、特に東の笠懸窯跡群について研究が進んでいる。そこではⅡ-2期に鹿ノ川瓦窯で図3Aの軒瓦とⅠ類の文字瓦の生産を開始するが、これらは国分寺以外ではほとんど新田郡内しか出土しないという特徴がある。そのため、この瓦窯の生産には新田郡が単独で関わっているものと思われる。つづくⅡ-3期には同じ窯跡群中の山際瓦窯が中心となり、図3Aの系譜を引く多くの范種の軒瓦と、Ⅱ類の文字瓦が生産される。文字瓦には勢多、佐位、山田という中・東毛の郡郷名が見えるので、これらの郡が新たに生産に関わったことが分かる。とすれば山際瓦窯は、Ⅱ-2期の鹿ノ川瓦窯の段階とは異なって、中・東毛の複数の郡（現状で分かっているのは勢多、佐位、新田、山田の4郡）が関わって生産を行っていたのであり、范種の増加や郡郷名文字瓦の生産開始は、そのためであると考えられる。郡郷名の文字瓦が生産されはじめた理由は、複数の郡が生産に関わり始めたので、その管理・運営上、各郡の生産分を区別する必要が生じたためであろう。しかしその文字瓦を詳しく見てみると、郡名しかない郡や郡名・郷名ともにある郡などがあり、生産の背景は郡によって異なっているようである。また、文字の入れ方も郡によって文字のみのスタンプとしたり、叩き板に入れたり異なっている。さらに国分寺以外の供給先を見ると、勢多、佐位の2郡は、自分の郡名の文字瓦は自郡内の遺跡でのみ用いているのに対し、山田郡の文字瓦は佐位郡内の遺跡などでも出土するという違いがあり、郡毎に供給先を厳密に管理していると思われる反面、供給先はまちまちである。つまり文字瓦からみると、山際瓦窯に関わる各郡は各々生産の背景が異なり、様相も様々な瓦を作っていたのであり、それをあえて統一しようという意志を見ることはできないのである。これは、各郡がそれぞれ各郡なりの事情を抱えたまま生産に参加したからだと思われる。軒瓦に多くの范種があるのも同様な理由によるものだろう。各郡がいろいろな独自性を保持したまま瓦生産に参加したために、范の種類も多く、文字瓦にも統一性の感じられない製品が作られたのだと考えられるのである。

同様なことは西の吉井・藤岡窯跡群でも見られるようである。ここではⅡ-3期に郡・郷名の文字瓦が出土しないので、関わっている郡名を具体的に明らかにすることはできないが、Ⅱ-2期に対してⅡ-3期の范種が増加するなど、笠懸窯跡群と同様な傾向を見て取れるからである。ここでも西毛の諸郡（あだの緑野、たご多胡、かんら甘楽など）が関わって生産を行っていたのであろう。

以上のように上野国分寺では、各瓦窯の生産に複数の郡が関わっていることが分かっているが、統一的な基準による強い規制が行われた形跡はなく、そのために関わった郡が各郡の独自の事情を抱えたまま生産に関与し、文様・技法、文字などに多くの種類がある瓦が作られたものと思われる。もちろん一つの寺院を作り上げていく上で生産・供給の管理は必須ひつとすは必ずであるが、実際に上野国側が行ったのは、数量・納期の管理と大きさの統一ぐらいだったのではなかろうか。最

低その程度の管理は行わないと、建物の完成に合わせて屋根を葺くことはできないからである。

#### 4 国衙工房と在地の瓦生産

このような上野国の特徴は、他の国と比べてみると一層明確になる。ここでは上野国の東西両隣、信濃国と下野国とを見てみよう。

信濃国分寺の創建期の軒瓦は、東大寺式の軒瓦のセット1種類のみである。この組み合わせは東大寺のものと同様であり、おそらく中央から工人がやって来て作ったものと推定されているが、注目されるのはこの瓦はほぼ国分寺専用で作られているらしいことである。つまり信濃では国分寺創建期に中央から工人を招聘し、在地の瓦生産とは切り離して国分寺専用の工房を設置して、短期間に集中して生産したものと考えられるのである。そこには国の強い管理が及んでいたことが想定され、いわゆる「国衙工房」の典型例と考えることができよう。

下野国でも「国衙工房」が設置されて瓦生産にあたったと考えられている。ここでは当初国内数カ所の瓦窯から瓦を供給しているが、その後三壺山窯跡群一カ所にほぼ限られるようになる。また、文字瓦の精緻な分析によって、創建期には国内全部が組織だって生産に参加していることが明らかにされている。軒瓦の文様は複数あるが、上野のように多様性があるわけではなく、特に軒丸瓦は一つの系統で理解できるものが大部分を占めている。以上のことから下野国でも国の強い管理の下に生産が行われていることは確実であり、その工房は「国衙工房」と呼ぶべきものであると指摘されている。(大橋泰夫『下野国分寺跡Ⅱ』1997などによる)

このように信濃、下野の両国では、もちろん違う点も数多くあって同一視は決してできないのではあるが、一元的な管理のもと、「国衙工房」と呼ぶべき工房で組織的な瓦生産が行われていたと考えられる点では共通している。それらと上野国の場合は、明らかに大きく異なっているといえよう。上野では生産組織そのものを一元的に管理していた形跡は見られないからである。

国分寺創建期まで、地方における瓦生産組織は、基本的に地方豪族の支配下にあったと考えられるが、前述したように8世紀前半という時期は瓦生産が盛んな時期ではなく、生産組織はかなり弱体化していたと考えられる。そのような時に大量生産に対応した体制を急遽作り上げるために、各国は様々な方策を用いたと思われるが、信濃、下野では生産組織を国衙の支配下に組み入れて生産を行うという体制を取り、上野では従来の生産組織をそのまま利用し、それに製品を発送するだけという体制を取ったのではないだろうか。もちろん、上野の場合も新技術の導入や人員の補充など、組織の拡充・整備が必要で、国の援助がその点で行われたと思われるが、「国衙工房」というような特別な体制に編成されることはなかったのではないかとと思われる。

そのことは、次のような点からも傍証することができると思われる。上野国には山王廃寺や上植木廃寺、寺井廃寺といった7世紀後半に創建された寺院をはじめとして、寺院遺跡が数多く存在し、そういった寺院遺跡からも8世紀中頃以降の瓦が数多く出土するのであるが、それらのう

ち国分寺と同范<sup>どうはん</sup>関係にないものはほとんどないのである。国分寺と同范でない瓦が分布するのは利根、吾妻、甘楽などの山間部にある少数の寺院遺跡のみであり、平野部の寺院遺跡から出土する瓦のほぼすべては国分寺と同范品である。つまり出土瓦から見る限り、上野国内の瓦窯の製品は常に国分寺と在地の寺院との両方に瓦を供給しているものであり、国分寺向けの生産だけが在地から切り離されたということはないのである。これほど在地の寺院と濃密な同范関係にある国分寺も少ないのではないだろうか。やはり、この点上野国の特徴を認めなければならないと思われる。上野国分寺の瓦は、「国衙工房」という形で再編成されるのではなく、在地の瓦生産を最大限利用し、その中で生産されていたと考えることができるのである。

### おわりに

国分寺の創建は天平13（741）年の聖武天皇の詔によって開始された、一大国家プロジェクトである。そのために「全国一律」に作られた印象があるが、実際に各国分寺を見ると多くの点で異なっており、瓦生産の体制にも多くの違いがある。その違いには、8世紀中頃、奈良時代中期という時期における各国の情勢の違いが反映されているものと考えられる。現状ではその違いの要因を明らかにすることは難しいが、各国の歴史を考える上で、その「違い」に注目することはとても重要なことだと思われる。律令国家は中央集権国家ではあるが、「中央集権」という固定的な見方に拘泥<sup>こうてい</sup>した視点のみでは、地方の豊かな歴史が埋もれてしまうと考えるからである。国分寺造営は全国一斉に行われただけに、各国の違いが鮮明になりやすい。各国の独自の歴史を考えていく上で格好の材料であるといえ、その視点からの研究も今後進展することが期待されるのである。

### 挿図出典

図1 前沢和之・高井佳弘「上野」『新修国分寺の研究第3巻』吉川弘文館 1991

原図は群馬県教育委員会『史跡上野国分寺跡発掘調査報告書』1988

図2～4 群馬県教育委員会『史跡上野国分寺跡発掘調査報告書』1988

図2の原図作成は加藤康子氏 図3の現品は群馬県教育委員会保管

図5 次の3文献から作成

須田茂・高井佳弘「台之原廃寺の瓦について」『台之原廃寺跡Ⅱ』蕨塚本町教育委員会 1986

群馬県教育委員会『史跡上野国分寺跡発掘調査報告書』1988

高井佳弘「上野国分寺跡出土の郡郷名押印文字瓦について」『古代』第107号 1999

現品は太田市教育委員会、群馬県教育委員会保管

## I 東山道諸国の国分寺

### 1 東山道と東山道諸国

#### (1) 平城京と五畿七道

元明天皇は和銅3年(710)、藤原京から平城京へ都を移した。この平城京は東西が約5.8km、南北が約4.8kmという広大な都であり、唐の都の長安にならって造営された。平城京は条坊制と呼ばれる碁盤目状に街路が走る街区で構成され、南端の羅城門から平城宮の南面の朱雀門まで南北に朱雀大路が設置されていた。当時の平城京の人口は約10万人程度と推測されている。

平城京の中央北端には平城宮(文献7)が置かれ、この形式は平城京が最初であった。平城宮の周囲には高さ約5mの築地大垣が建てられ、東西約1.3km、南北約1kmの範囲であった。この平城宮には天皇の居住空間である内裏、国家的な儀式や政務が行われた大極殿・朝堂院、行政の実務が行われた各役所である曹司などが配置されていた。中央の役所としては二官八省が置かれ、二官の神祇官・太政官、八省の中務・式部・治部・民部・兵部・刑部・大藏・宮内など



平城宮跡(奈良市)



平城宮跡出土踞脚円面礎(奈良文化財研究所写真提供)

の役所の建物が並んでいた。この地域は奈良文化財研究所によって発掘調査が進められ、円形をした硯である円面硯や墨書土器、軒丸瓦、軒平瓦、鬼瓦などの重要な資料が多数出土している。

平城京を首都として、律令制下では地方の諸国は五畿（山城・大和・河内・和泉・摂津の畿内五方国）と七道（東海・東山・北陸・山陰・山陽・南海・西海の各道）に区分されていた。七道は地方区分であるとともにその地域を貫く交通路をも意味していた。

## (2) 東山道

東山道は行政区分としての「道」と、この地方に設置された官道としての「道」の意味を有していた。行政区分としての東山道には当初、近江・美濃・飛騨・信濃・武蔵・上野・下野・陸



奥・出羽の諸国が所属していた。都からの遠近によって近江・美濃は近国、飛騨・信濃は中国、その他の諸国は遠国に区分された。このうち中国の信濃から都への行程は、上り21日、下り10日と規定されていた。なお武蔵国は最初東山道に属していたが、宝亀2年(771)には東海道へ所属替えになり、以後東海道諸国の一つに区分された。

「道」としての東山道は、天武天皇14年(685)に東海・東山・山陽・山陰・南海・筑紫に巡察使が派遣されており、七道制がこの頃までに成立したとみられている。大宝元年(701)には律令制度の基本法として大宝律令が制定された。この大宝律令には行政区分として「七道」がみられ、この頃までには(古代における官吏・公使による中央と地方との交通・通信の制度)が整備されたと考えられている。諸国の駅制の様子を記した史料は『延喜式』兵部省諸国駅伝馬の条で、10世紀初頭までの全国の駅名が記されている。

東山道は七道の中で距離が最も長く、『延喜式』によると駅家86ヶ所、駅馬841疋、船10隻、伝馬221疋を数えた。30里(約16km)ごとに一駅置かれ、駅には駅長がおり、馬が10疋常備されていた。東山道の多くは山道で、難所も多かったが、承和2年(835)以降東海道に渡船や橋が整備されるまで、この東山道が奥羽開拓の最も重要な交通路であったと推測されている。

### (3) 東山道の国分寺

奈良市雑司町には総国分寺とも称される東大寺があり、大和国分寺の僧寺である。ところで東山道の8ヶ国(後に東海道へ所属替えになった武蔵国を除く)の国々には、国分僧寺と国分尼寺が8世紀中頃から後半に建立された。

近江国分寺の僧寺跡は、滋賀県甲賀市信楽町の甲賀寺跡、大津市の瀬田廃寺跡などに推定されている。尼寺跡は未詳である。美濃国分寺の僧寺跡は、岐阜県大垣市青野町に所在し、尼寺跡は岐阜県不破郡垂井町平尾に推定されている。飛騨国分寺の僧寺跡は、岐阜県高山市総和町に所在



東大寺(奈良市)

し、尼寺跡は未詳である。信濃国分寺の僧寺跡は、長野県上田市国分に所在し、尼寺跡も西方に隣接して確認されている。上野国分寺の僧寺跡は、群馬県高崎市東国分町・引間町と一部が前橋市元総社町に所在している。尼寺跡は高崎市東国分町に確認されている。下野国分寺の僧寺跡は栃木県下野市国分寺に所在し、尼寺跡も東方約600mの地点に確認されている。陸奥国分寺の僧寺跡は宮城県仙台市木ノ下に所在し、尼寺跡は仙台市白萩町に確認されている。出羽国分寺の僧寺跡は、山形県酒田市八幡町の堂の前遺跡などに推定されている。尼寺跡は未詳である。

このうち陸奥国分寺跡は大国の国分寺として規模が大きく、回廊で囲まれた七重塔跡や軒廊で結ばれた講堂と僧房、中門と金堂を結ぶ複廊の回廊などが確認されている。また下野国分寺跡は近年伽藍地を中心に詳細な発掘調査が実施され、多大な成果を収めている。



下野国分寺跡（栃木県下野市）



陸奥国分寺跡（宮城県仙台市）

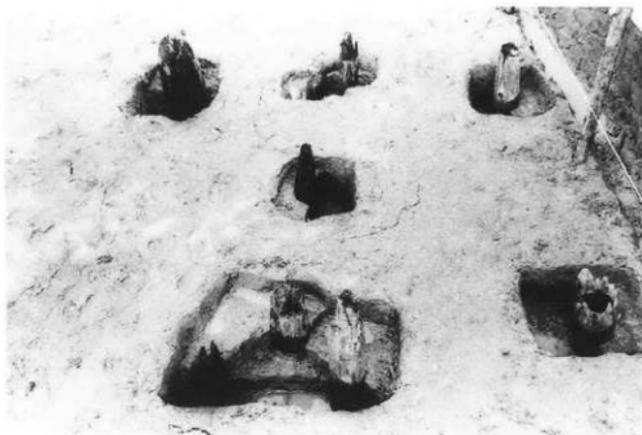
## II 遺跡からみた各地の国分寺跡

### 1 美濃国分寺跡

美濃国分寺は美濃国府（垂井町府中）や古代の三関のひとつとして知られる不破関（関ヶ原町）に近い濃尾平野最西部の青野ヶ原に建立された。昭和43年から実施された継続的な発掘調査（文献8）によって、寺域は築地をめぐらす東西230m、南北250m以上の範囲であることが確認された。また伽藍配置は中門と金堂を結ぶ回廊内に塔を配した大官大寺の形式であることもわかり、塔を回廊外に配置する多くの国分寺の先行形式であることがつかめた。埴積基壇をもつ金堂跡の下部や中門跡周辺から古様を示す八葉複弁蓮華文軒丸瓦や重弧文軒平瓦が検出されることから、ここにあった前身寺院を国分寺にあてたとみられる。寺域の西側に確認された僧房は掘立柱建物であり、これらの遺構も前身寺院の建物をそのまま国分寺の堂宇としたものであろう。なお、美濃国分寺は仁和3年（887）6月、火災により焼失したため、一時その機能を席田郡定額尼寺に移した記録があるが、平安後期に再びこの旧地に再建したという。

発掘調査によって、中門跡・南門跡・塔跡・回廊跡・金堂跡・講堂跡・僧房跡・鐘楼跡の建物遺構などが確認された。これらの建物は寺域のやや西寄りに南門・中門・金堂・講堂が南北に一直線上に配置され、回廊は中門から金堂に取り付けられている。塔はこの回廊内の東側に造られ、鐘楼は回廊外側の北西部にある。掘立柱建物の僧房は回廊外の西側にある。

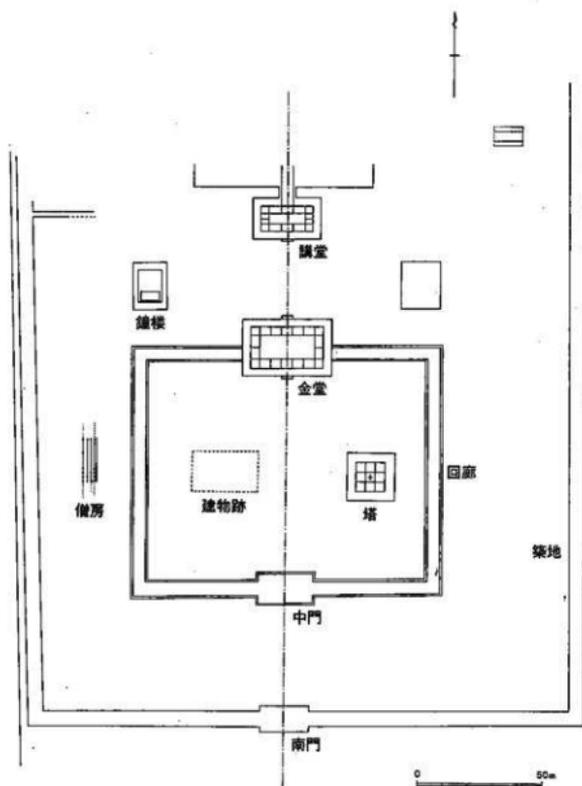
出土遺物は瓦と土器が最も多いが、瓦類は特に金堂・講堂・回廊の雨落ち溝周辺から集中して確認された。前身寺院の建物に使用された前述の八葉複弁蓮華文軒丸瓦や重弧文軒平瓦、国分寺建物に使用されたとみられる十六葉単弁蓮華文軒丸瓦、均整唐草文軒平瓦など数種の瓦文が検



美濃国分寺鐘楼跡柱穴出土状況  
(大垣市教育委員会写真提供)

出されている。また、鬼瓦と軒丸瓦が一体となった珍しい鬼面瓦も出土している。土器類も奈良期から平安・鎌倉期に至る土師器・須恵器・灰釉陶器の各種があるが、なかでも「美濃国」刻印土器、「東門」「口村富」「賣牛」などの墨書土器が注意される。このほか円面硯や八稜硯なども発見されている。

一帯の史跡整備は、昭和49年から発掘調査と併行して実施され史跡公園化がはかられ、昭和57年にはこの史跡公園に隣接して美濃国分寺跡出土の遺物を展示する大垣市歴史民俗資料館が開館し、史跡の活用が図られている。



美濃国分寺跡伽藍図  
 (『史跡美濃国分寺跡』大垣市教育委員会2005年より引用)



整備された美濃国分寺塔跡の礎石



十六葉単弁蓮華文軒丸瓦と均整唐草文軒平瓦  
(美濃国分寺跡出土・創建期)

## 2 上野国分寺跡

群馬県高崎市東国分町・引間町と、一部が前橋市元総社町に所在する上野国分寺の僧寺跡（文献9）は、昭和55年(1980)から平成元年(1988)まで、史跡の保存整備事業に伴う発掘調査が実施された。その結果、塔跡、金堂跡、南大門跡や創建期のものとみられる掘立柱建物跡、9世紀代とみられる修理用の鍛冶場跡などが確認された。塔は基壇の一辺の長さが19.2m、塔本体は一辺が10.8mあり、国分寺の塔では最大規模のものであることが確認された。また金堂は24m×13.5mの大きさで、7間×4間の建物であったことが明らかにされた。主要な伽藍の範囲は東西が約218m、南北が約235mで、榛名山の南東麓に広がる扇状地の末端に位置し、南側には染谷川が流れる台地上に所在している。

上野国分寺跡については『統日本紀』の天平感宝元年(749)五月条の記事から、地元の上毛野氏や石上部氏によって、この頃に塔・金堂などがすでに建立され、他の諸国に比べて早い時期に伽藍が完成されたと推測されている。また平安時代の長元3年(1030)に製作された『上野国交替実録帳』に、築垣(築地塙)、大門、僧房などの建物が滅失し、金堂の本尊の丈六釈迦像なども破損している状況が詳しく記されている。このように上野国分寺は史料に当時の記録が残されており、文献と対比される貴重な遺跡である。

発掘調査によって多量の軒丸瓦・軒平瓦が出土し、軒丸瓦は77種、軒平瓦は85種類が確認されている。また文字瓦・記号瓦も2000点を超える資料が出土した。この瓦類の内容の検討から創建期には新田、佐位、山田、勢田などの郡ないしは郷単位で瓦を提供し、補修紀には多胡、緑野郡から個人単位で提供されていたことが知られている。また補修に関係した氏族として、物部、



南大門跡付近の発掘調査状況  
(群馬県教育委員会写真提供)

大伴、勾倉人、壬生などが確認されている。この他に奈良三彩陶片、瓦塔片、塑像片や、「造仏」の墨書土器、鍛冶に用いた埴埴などが出土して注目されている。

昭和63年(1988)から僧寺跡の史跡整備事業が開始され、民有地の公有化、金堂・塔の基壇の復元、南辺築垣の復元、史跡ガイダンス施設の上野国分寺館などが設置されている。なお、尼寺跡は僧寺跡の東側約330m(約3町)の高崎市東国分町一帯に所在している。昭和44年(1969)、45年(1970)に講堂跡の礎石群の調査や、金堂、中門、東門跡などが試掘調査され、主要部が少しずつ明確にされている。



上野国分寺僧寺金堂跡調査状況  
(群馬県教育委員会写真提供)



僧寺跡出土平瓦



復元整備された築垣（ついがき）



復元整備された塔跡



五葉半弁蓮華文軒丸瓦  
(創建期)



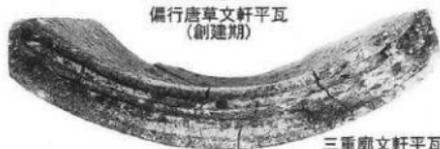
四葉半弁蓮華文軒丸瓦



備行唐草文軒平瓦  
(創建期)



八葉半弁蓮華文軒丸瓦



三重廓文軒平瓦

上野国分寺跡出土軒瓦



文字瓦「勾舍人」



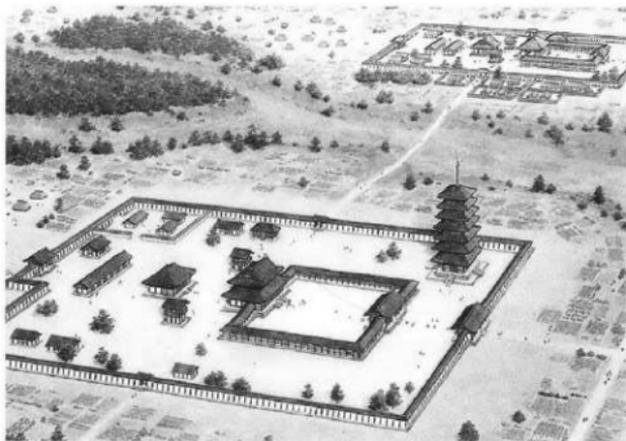
墨書土器「造仙」

### 3 下野国分寺跡

下野市国分寺に所在する下野国分寺の僧寺跡は、思川左岸の台地上に位置している。この僧寺跡の東側約600mの同じ台地上には尼寺跡があり、北東約7kmの地点には下野薬師寺跡がある。また西側の思川対岸の栃木市には下野国府跡が確認され、この地域が古代下野国の中心地であった。この一帯には魔利文天塚古墳、琵琶塚古墳、吾妻古墳、甲塚古墳などの古墳時代後期の大型古墳が地域の首長によって継続的に築造され、古墳から寺院への変遷が窺える重要な地域である。

昭和57年（1982）から寺域の確認を目的とした発掘調査（文献10）が栃木県教育委員会によって実施され、寺域の変遷や遺構の規模などが明らかになった。国分寺の伽藍地は3期の変遷がみられ、当初の寺域は掘立柱の板塀によって画され、その規模は東西約775尺（232.5m）、南北約840尺（252m）とみられている。平安時代には外郭施設を縮小して、築地塀に改めている。伽藍の配置は南大門・中門・金堂・講堂が中軸線上に並んだ東大寺式（国分寺式）の伽藍配置で、中門と講堂が回廊で結ばれ、塔は回廊の東方の外側に位置している。

また平成11年から16年には国分寺町教育委員会（現下野市教育委員会）によって金堂、中門、回廊、講堂、経藏、鐘樓、軒廊、僧房、東門、塔跡が詳細に調査（文献11）され、多大な成果を収めている。このうち金堂跡の調査では良好な残存状態の基壇外装や階段などが検出された。また僧房跡では基壇外装とみられる羽目石列などから部屋数は10室と推測された。さらに塔跡の調査で、南階段の地覆石、階段と三角形の耳石（階段羽目石）が出土し、階段の幅が3.6m、階段の出が90cm、基壇の高さが80cmであることが解明された。また塔の柱間はすべて3.6mで、3間規模のため10.8mあり、塔基壇の規模は16.8mであった。四天柱の直径は火災による礎石の



下野国分寺推定復元図（下野市教育委員会写真提供）

変色から直径約75cmであることが判明し、塔の具体的な構造が詳細に解明されている。

出土遺物は、大量の軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦、鬼瓦、文字瓦などの瓦類がみられる。創建期の瓦は、じんからくさもんもん園唐草文縁の八葉複弁蓮華文軒丸瓦と均整唐草文軒平瓦である。また土師器、須恵器、あいでんとうき灰釉陶器、あざとくちゆうとうき緑釉陶器、青磁、あうたて鉄製風鐸、てしちゆう鉄製釘、でいとう泥塔(小型の粘土製の塔)、ぼくしよどま灯明皿、てつしよどま墨書土器、てつしよどま鉄鉢型土器などの貴重な資料が出土している。なお、文字瓦には郡名・郷名・人名などがみられ、墨書土器には「金」、「講」、「講院」などの墨書がみられる。



八葉複弁蓮華文軒丸瓦



鬼面文鬼瓦

(目を怒らせ牙をむく鬼面を文様とした鬼瓦)



均整唐草文軒平瓦



鉄製釘



泥塔  
(ていとう)

下野国分寺僧寺跡出土遺物 (下野市教育委員会写真提供)



鉄鉢型土器



鉄製風鐸  
（塔跡から出土し、塔の四隅に  
吊り下げていたとみられる）



風鐸舌

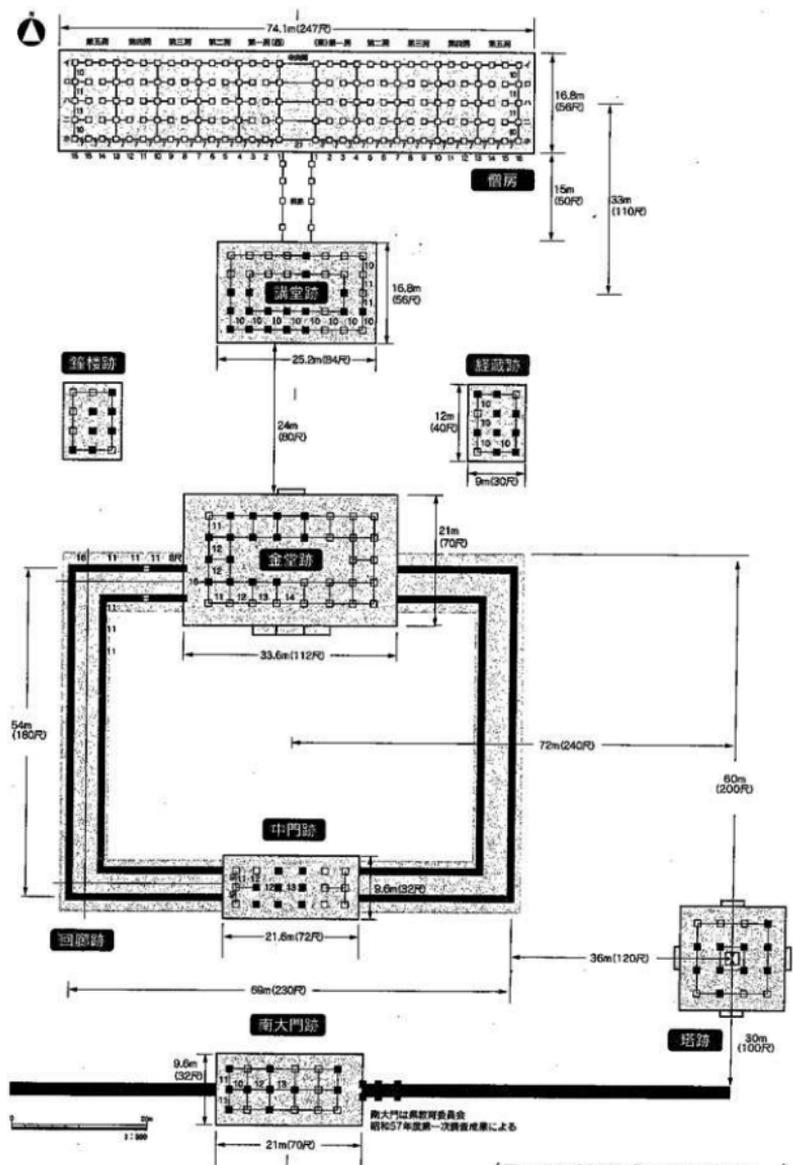


墨書土器「金」

下野国分寺僧寺跡出土遺物（栃木県教育委員会写真提供）



整備された下野国分寺尼寺跡



下野国分寺伽藍規模概略図 (展示説明会資料『下野国分寺跡』  
国分寺町教育委員会2005年より引用)

### III 古代の信濃と国分寺

#### 1 古代信濃と東山道

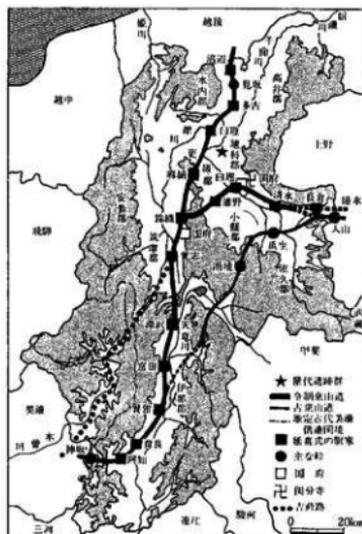
##### (1) 長野県内の東山道推定路

長野県内の古代の東山道については、『延喜式』兵部省諸国駅伝馬の条の「信濃国」の項に、駅に備えつけの馬の数は「阿知 卅疋。青良、賢雑、宮田、深沢、覚志各十疋。錦織、浦野各十五疋。日理、清水各十疋。長倉十五疋。麻績、日理、多古、沼辺各五疋」とあり、阿知駅には30匹、青良・賢雑・宮田・深沢・覚志の駅には各10匹、錦織・浦野の駅には各15匹、日理・清水の駅には各10匹、長倉駅には15匹、麻績・日理・多古・沼辺の駅には各5匹の馬が準備され、人や物資を運んでいたことがうかがえる。

こうした駅名から信濃国の東山道ルート推定してみたい。美濃国から信濃国の入口にあたる神坂峠を経て阿智村の駒場の地に阿知駅が推定されている。この阿知駅は難所であった神坂峠越えに備えて、通常の3倍にあたる30匹の馬が配置されていた。なお、神坂峠からは峠越えの安全を祈って奉納された鏡・剣・勾玉・刀子などをかたどった石製模造品が多数出土している。

阿知駅を通過した東山道は育良駅、賢雑駅、宮田駅を経て深沢駅に向かう。この深沢駅は、奈良・平安時代の土師器、須恵器、緑釉陶器、馬具などが大量に出土した箕輪町の中道遺跡周辺に推定されている。箕輪町には「春日街道」と呼ばれる古道があり、「山道」地名などの詳細な調査で東山道ルートと推定（文献5）されている。この春日街道の通過する大道上遺跡（文献12）では、道路に並行する形で溝状遺構が約52mに渡って検出され、東山道の側溝の一部ではないかと考えられている。

深沢駅の後に覚志駅から錦織駅を経て保福寺峠を越え、浦野駅、日理駅、清水駅、長倉駅を通過して上野国へ向かうルートが東山道の本道である。これに対して麻績村に推定される麻績駅、長野市安茂里付近の日理駅、長野市三才の田子遺跡付近の多古駅、野尻湖付近に推定される沼辺駅を経て越後国府に至るルートが東山道の支道とされている。



古代の信濃国

『屋代遺跡群総論編』  
長野県埋蔵文化財センター  
2000年より引用

## (2) 上田地方出土の道路状遺構

上田地方には浦野駅、日理駅が置かれていた。浦野駅は青木村の大法寺大門前の小字元宿付近や大字青木地籍に推定されている。また日理駅は千曲川に近く、塔心礎や瓦塔片が出土した上田市諏訪部の唐臼遺跡付近に推定されている。この日理駅を経て信濃国分寺跡の南側を通過して神川を渡り、東御市に至るルートが想定されている。なお、信濃国分寺跡南側については東山道推定路に沿って溝跡が一条調査で確認（文献13）されており、道路の側溝の可能性が考えられる。

信濃国分寺跡の北方に位置する国分遺跡群（文献14）からは、平成11年に両側に側溝を有した、南北に通じる幅約9mの道路状遺構が、全長約15mに渡って検出された。この場所は現在の信濃国分寺本堂北西側約100mの地点であり、南側に延長すると僧寺跡と尼寺跡の中間を通り、南方の東山道に合流する可能性が考えられている。この道路状遺構は、信濃国分寺と国府などの役所を結ぶ道路であった可能性が推測されている。

上田市の駕籠田遺跡（文献15）では、八世紀後半から九世紀初頭の43棟の掘立柱建物群と両側に側溝を有した幅約6mの道路状遺構が約40mに渡って検出された。この付近には東山道の通過が推定されており、この道路状遺構は東山道から分岐した道路の可能性が推測される。

平成17年10月には上田市小泉の字長谷田地籍で、両側に側溝がある道路状遺構が検出（文献16）された。この道路状遺構は両側溝の心々距離が約12mで、幅約6mに渡って確認された。道路面の上部は水田耕作などで削平されていたが、叩き締められた硬化面が残存していた。この地点は浦野川の河岸段丘上北端で、小泉条里水田遺跡の範囲内であった。この場所から南東約200mの場所には八世紀後半から九世紀の郡や郷の役所跡とみられる高田遺跡（文献17）が存在する。北方には「大道下」の地字名があり、以前から東山道が推定されていた地点で注目される。



国分遺跡群出土道路状遺構



信濃国分寺跡・東山道推定路・道路状遺構位置図

## 2 信濃国分寺跡

### (1) 信濃国分寺跡の調査

上田市国分字仁王堂・字明神前に所在する信濃国分寺跡は、千曲川を南方に望む第三段丘上に所在している。北側の一段上の第二段丘面には、古代の国分寺の伝統を受け継いだ天台宗の信濃国分寺があり、信濃国分寺跡の南側前方には官道の東山道が推定されている。

昭和38年から46年にかけて信濃国分寺跡（文献2・18）は発掘調査が実施され、僧寺跡と尼寺跡の伽藍の全容が明らかにされている。僧寺跡の調査は講堂跡・金堂跡・中門跡・回廊跡・僧房跡・塔跡が確認され、これらの建物を囲む築地は100間（約177m）四方であることが解明された。また尼寺跡は僧寺の築地からの距離が約40mと西側に近接して確認され、中門・金堂・講堂・尼房・北門跡が検出され、僧寺と同様に建物が南北一直線に並ぶ東大寺式（国分寺式）伽藍配置であることが確認された。この尼寺跡は80間（約148m）四方であることが解明された。

出土遺物は軒丸瓦・軒平瓦・鬼瓦・丸瓦・平瓦・文字瓦などの大量の瓦類や、須恵器・土師器・緑釉陶器・灰釉陶器・青磁碗・円面硯・古銭・鉄釘などが出土した。このうち創建期の八葉複弁蓮華文軒丸瓦は奈良市の東大寺や興福寺から出土した軒丸瓦と酷似しており、軒丸瓦の型式は平城京出土軒瓦の6235型式（文献19）に分類されている。また創建期の均整唐草文軒平瓦は奈良市の西隆寺付近から出土した軒平瓦と同范（同じ型で製作した同一文様の瓦）であることが、最近の調査（文献21）で判明し、6734型式C種に分類されている。

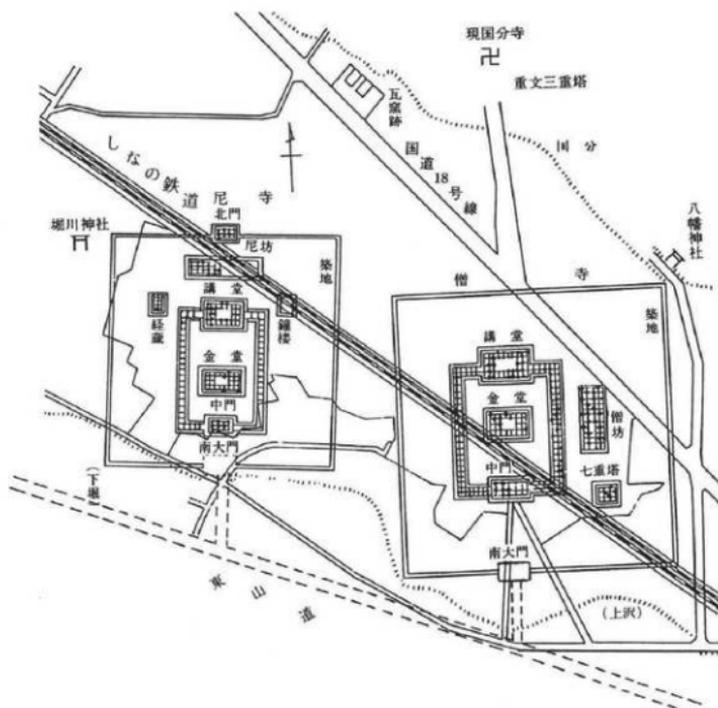
以前から平城宮法華寺北側出土の軒平瓦と酷似していることは指摘（註4）されていた。が、今回西隆寺付近出土軒平瓦と同范であることが解明された結果、信濃国分寺の造営は西大寺や西隆寺と同じく、道鏡の全盛期（765年から770年）に行われた可能性が高いこと、造営に際して



昭和30年代後半の信濃国分寺跡。一帯は水田・桑畑であった

「造西隆寺司」の役所に所属する瓦工の一部を派遣して瓦製作を行った可能性が指摘（文献21）されている。この信濃国分寺創建期のセットになる八葉複弁蓮華文軒丸瓦と均整唐草文軒平瓦は、僧寺の金堂跡・講堂跡・中門跡や尼寺の金堂跡から多数出土し、伽藍中樞部の建物に用いられ、出土した全体の軒丸瓦の97%、全体の軒平瓦の98%以上を占めると推定されている。（文献20）

信濃国分寺跡から出土した軒丸瓦は創建期の八葉複弁蓮華文の他に、<sup>わらびでもん</sup>蕨手文・<sup>さんどういんもん</sup>三重圓文・<sup>し</sup>四葉単弁蓮華文・<sup>ごへん</sup>十二葉素弁蓮華文の軒丸瓦が尼寺跡から出土している。また軒平瓦は他に均整蓮



信濃国分寺僧寺・尼寺伽藍配置図（奈良時代）



和同開珎(わどうかいちん)

和銅元年（708）に発行されたわが国で2番目に古い金属貨幣。尼寺跡から出土。



緑釉陶器

香炉のふたと推定される。信濃国分寺跡出土。



僧寺講堂跡の雨落溝出土状況



尼寺金堂跡東南隅と南側の雨落溝遺構

華文軒平瓦が出土している。このうち蕨手文軒丸瓦と均整蓮華文軒平瓦はセットになる資料で、平安時代初期の信濃国分寺の補修用瓦を焼成した国分寺瓦窯跡や尼寺東門地区・僧寺跡北方地点などから出土している。文字瓦では「更」、「伊」とヘラ書きされた瓦が出土しており、それぞれ「更級郡」、「伊那郡」の郡名を表わし、これらの郡が経費を負担した瓦であることを示している。この他に和同開珎や緑釉陶器、講師の居所を示す墨書土器「講院」など多数の遺物が出土した。なお、現在の信濃国分寺には平安時代後期と推定される十二神将像が所蔵されている。



信濃国分寺僧寺金堂跡北側の雨落溝と出土瓦類



信濃国分寺僧寺講堂跡瓦出土状況



八葉複并蓮華文軒丸瓦 (僧寺跡)



文字瓦「更」(瓦窯跡)



藤手文軒丸瓦 (尼寺東門地区)



文字瓦「伊」(尼寺金堂跡南側)



三重圈文軒丸瓦 (尼寺金堂跡南側)



四葉単并蓮華文軒丸瓦 (尼寺金堂跡南側)



南方より望む史跡信濃国分寺跡（手前には千曲川が流れる）



墨書土器「講院」

尼寺跡西側の明神前遺跡7号建物跡より出土。  
地方の僧官である国師が延暦14年（795）に  
講師と改められたが、この講師の居所を示す  
ものとみられる。



木造十二神符像(信濃国分寺所蔵)

現存する十二神符像より古い像が一  
体だけ伝えられている。平安時代後  
期の作と推定される。

## (2) 信濃国分寺跡出土軒平瓦と平城京跡西隆寺付近出土軒平瓦

信濃国分寺跡出土の均整唐草文軒平瓦と同範とみられる軒平瓦が、奈良市教育委員会の平成15年11月の調査で、平城京右京二条二坊十六坪に当たる奈良市西大寺国見町1丁目2137-85-66番地から出土していたことが判明した。これは平成18年5月に、奈良市教育委員会の中井公氏、宮崎正裕氏、原田憲二郎氏が信濃国分寺資料館に平城京跡出土軒平瓦を持参して、信濃国分寺跡出土軒平瓦と現物を詳細に対比した結果、同範が確認されたものである。その後、奈良文化財研究所考古第三研究室長の山崎信二氏と同室研究員林正憲氏が、6月に奈良文化財研究所において再度現物を詳細に対比して同範を確認（文献21）し、6734形式C種に分類されている。

この平城京跡出土軒平瓦は、西隆寺の寺地よりさらに三坪南側の地点の井戸跡から出土した。この井戸跡からは他に多数の軒平瓦が出土しているが、すべて西隆寺所用瓦であることが奈良市教育委員会の調査で判明しており、この同範の軒平瓦も西隆寺所用瓦であった可能性が高いとみられている。西隆寺地内の調査では、これまで6734形式A種の軒平瓦の破片が1点出土したのみであるが、今後6734形式C種が出土する可能性が指摘されている。



信濃国分寺跡出土軒平瓦



平城京跡西隆寺付近出土軒平瓦



奈良市西隆寺付近発掘調査状況



信濃国分寺跡出土軒平瓦と同范とされる軒平瓦が出土した西隆寺付近の井戸跡  
(奈良市教育委員会写真提供)

## 西隆寺と出土軒瓦

西隆寺は『統日本紀』神護景雲元年（767）8月条の記載により、この年から称徳天皇の意向で造営が開始されている。西隆寺は尼寺で、西側に近接する僧寺の西大寺と一対になり、東大寺に対する法華寺に対応する寺院である。『弘仁式』に「西隆寺料一万束」と記され10世紀には存続しているが、文献から鎌倉時代の建長3年（1251）以前に廃絶したと考えられている。

昭和46年（1971）、その後昭和64年から平成4年にかけて奈良文化財研究所によって西隆寺跡の発掘調査が実施（文献22）され、金堂・塔・東門・回廊<sup>じきどう</sup>・食堂・築地・井戸などが確認され、大量の瓦類や土師器・須恵器・緑釉陶器・木製品などが出土した。軒丸瓦は八葉複弁蓮華文で1+5の蓮子を置き、6235型式C種に分類される軒丸瓦が全体の4割程度を占め最も出土量が多い。また軒平瓦は均整唐草文で6761型式A種に分類される軒平瓦が全体の5割を占め、最も出土量が多い。この西隆寺の造営を担当した「造西隆寺司」から瓦工が信濃に派遣され信濃国分寺の瓦製作を行ったことは極めて異例で、特殊な事情があったと指摘（文献21）されている。



西隆寺跡出土軒丸瓦



西隆寺跡出土鬼瓦



西隆寺跡出土軒平瓦

（奈良文化財研究所写真提供）

### (3) 近年の信濃国分寺僧寺跡の調査

平成12年12月から平成18年まで、信濃国分寺跡の史跡保存整備事業に伴う発掘調査が僧寺跡を中心に継続的に実施されている。平成12年から15年にかけては、僧寺跡北東域の調査が上田市教育委員会により実施された。その結果、僧寺北東隅の築地跡や区画施設は明確に確認されなかったが、多量の瓦や8世紀末から9世紀を中心とする須恵器・土師器などが出土した。信濃国分寺は従来から770年頃までには主要な伽藍が整備されたと推定されているが、その後も整備、修復が進行していた可能性が出土遺物からはうかがえた。調査地区からは拳大から人頭大の川原石をびっしりと敷き詰めた広範囲な石敷遺構や掘立柱建物跡が5棟確認された。この石敷遺構については段丘下の湿地帯を地固めた地業の痕跡、何らかの屋外施設の跡、庭園遺構の可能性などの推定がなされた。また佐久郡を示す「佐久」をヘラ書きした須恵器片が2点出土した。

平成16年には南大門跡想定地（文献23）が調査された。その結果、南大門の礎石の根石と考えられる集石遺構が10ヶ所で検出され、ほぼ想定された地点に南大門跡が確認された。検出された南大門の規模は、間口3間（10.5m）、奥行き2間（6.6mもしくは6.9m）あり、八脚門であることが解明された。この南大門の調査では、瓦の出土量が当初少なく、椀皮葺きや柿葺きの可能性が考えられた。が、調査の最終段階で信濃国分寺創建期の八葉複弁蓮華文軒丸瓦が3点出土し、また平瓦・丸瓦の出土もみられ、金堂・講堂などと同様に瓦葺きの可能性が考えられている。この南大門跡の根石間には南北方向に幅約2m、深さ約1mの暗渠排水遺構が検出された。拳大から人頭大の川原石を詰めて突き固めたこうした暗渠排水遺構は調査区の各所から出土しており、雨水の溜まりやすいこの場所では大規模な暗渠排水施設を必要としたと推測されている。



信濃国分寺僧寺跡北東域の調査（平成15年11月）

### 3 依田古窯跡群

上田市生田の北原から飯沼、さらに塩田地区にかけての小牧山南麓の山腹と御岳堂の南原、中山の日向山北麓と南麓の山腹には20基以上の窯跡が集中しており、依田古窯跡群として知られている。昭和26年には東京大学考古学研究室を主体とする調査が実施され、窯跡3基（文献25）が確認された。この調査では新原田新開窯跡が調査され、窯跡の底面の縁に33片の平瓦が並べられて検出された。これらの平瓦は須恵器窯の構築材として用いられていたが、大きさ、凸面の縄目き目、凹面の布目圧痕、一枚造りの製作技法などから信濃国分寺跡出土平瓦と同一のものと考えられ、依田古窯跡群を中心に信濃国分寺の創建期の瓦類は生産されたと推定されている。昭和60年には原山窯跡（文献26）が調査され、須恵器の坏・坏蓋・甕などの破片が出土し、8世紀後半から9世紀初頭にかけて須恵器生産をしていたことが確認された。また窯跡群の東方には



窯業を管理した役所跡とみられる諏訪田遺跡（文献27）が所在している。こうした瓦・須恵器は依田川、千曲川を利用した舟運で、約10km離れた信濃国分寺まで運搬されたと推測される。

なお、東御市中八重原の幸上窯跡からは平安時代初期の瓦窯跡が1基検出（文献28）され、出土した平瓦の形状から信濃国分寺尼寺の瓦類を供給したと指摘されている。

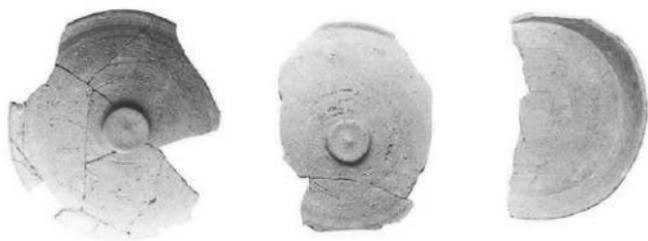
上田市依田古窯跡群分布図



上田市新原田新開窯跡出土平瓦（縄叩き目）



上田市原山窯跡調査状況

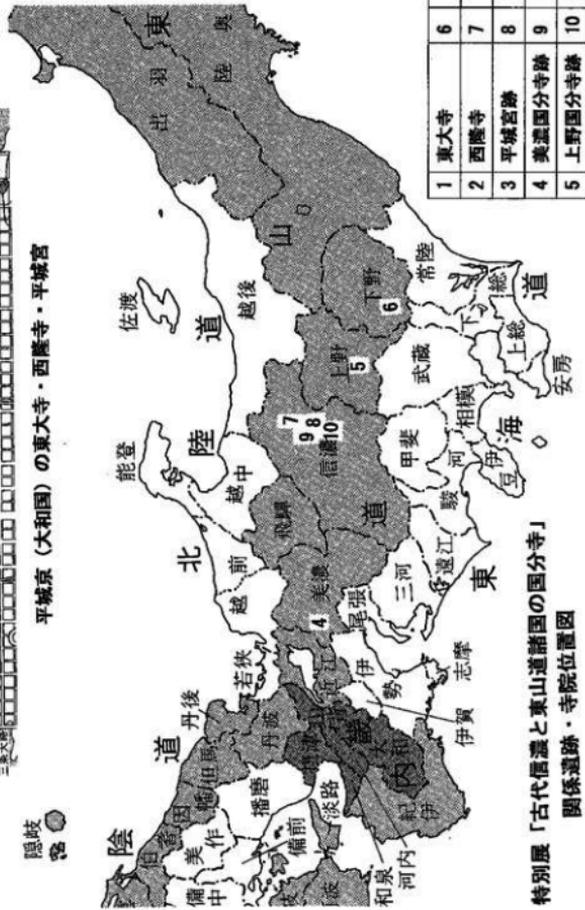


原山窯跡出土須恵器



平城京(大和国)の東大寺・西廂寺・平城宮

隠岐



1 東大寺	6 下野國分寺跡
2 西廂寺	7 信濃國分寺
3 平城宮跡	8 信濃國分寺跡
4 美津國分寺跡	9 明神前遺跡
5 上野國分寺跡	10 依田古齋跡

特別展「古代信濃と東山道諸國の国分寺」

關係遺跡・寺院位置圖

展示資料目録

NO	資料名	点数	出土地	所有者
1	均整唐草文軒平瓦	1	奈良市法華寺北側	奈良文化財研究所
2	"	1	奈良市西隆寺跡	"
3	鬼瓦	1	"	"
4	八葉複弁蓮華文軒丸瓦	1	"	"
5	均整唐草文軒平瓦	1	"	"
6	八葉複弁蓮華文軒丸瓦	2	奈良市東大寺	"
7	圓足円面硯	2	奈良市平城宮跡	"
8	踏脚円面硯	1	"	"
9	均整唐草文軒平瓦	1	奈良市西隆寺付近	奈良市教育委員会
10	八葉複弁蓮華文軒丸瓦	1	大垣市美濃国分寺跡	大垣市教育委員会
11	十六葉単弁蓮華文軒丸瓦	1	"	"
12	四葉複弁蓮華文軒丸瓦	1	"	"
13	重弧文軒平瓦	1	"	"
14	均整唐草文軒平瓦	1	"	"
15	磚(せん)	1	"	"
16	平瓦(網目叩き)	1	"	"
17	平瓦(格子目叩き)	1	"	"
18	鬼瓦	1	"	"
19	須恵器坏身	1	"	"
20	灰釉陶器碗	1	"	"
21	円面硯	1	"	"
22	八稜硯	1	"	"
23	刻印土器「美濃国」	1	"	"
24	墨書土器「東門」	1	"	"
25	" 「口村富」	1	"	"
26	" 「賣牛」	1	"	"
27	柱根	3	"	"
28	泥塔(でいとう)	3	下野市下野国分寺跡	下野市教育委員会
29	鉄釘	1	"	"
30	文字瓦「熊田郷」	1	"	"
31	" 「木部牛麻呂」	1	"	"
32	八葉複弁蓮華文軒丸瓦	1	"	"
33	均整唐草文軒平瓦	3	"	"

34	毘沙門天像	1	下野市下野国分寺跡	下野市教育委員会
35	灯明皿	2	"	"
36	鬼瓦片	2	"	"
37	富寿神宝	2	"	"
38	丸瓦	1	"	"
39	緑釉綾碗	1	"	"
40	風鐸（ふうたく）	1	"	栃木県教育委員会
41	風鐸舌	1	"	"
42	朱付き軒平瓦	1	"	"
43	文字瓦「矢」（梁田郡）	1	"	"
44	"「足」（足利郡）	1	"	"
45	"「安」（安蘇郡）	1	"	"
46	"「川」（寒川郡）	1	"	"
47	"「内」（河内郡）	1	"	"
48	"「塩」（塩屋郡）	1	"	"
49	"「那」（那須郡）	1	"	"
50	墨書土器「金」	1	"	"
51	"「講」	1	"	"
52	"「金」	1	"	"
53	"「講院」	1	"	"
54	鉄鉢型土器	1	"	"
55	奈良三彩片	2	高崎市上野国分寺跡	群馬県教育委員会
56	塑像片	3	"	"
57	四葉単弁蓮華文軒丸瓦	1	"	"
58	五葉単弁蓮華文軒丸瓦	1	"	"
59	八葉単弁蓮華文軒丸瓦	2	"	"
60	偏行唐草文軒平瓦	2	"	"
61	重廓文軒平瓦	1	"	"
62	丸瓦	1	"	"
63	平瓦	1	"	"
64	鬼瓦	1	"	"
65	瓦磚（がせん）	1	"	"
66	瓦塔片	1	"	"
67	文字瓦押印「山田」	1	"	"

68	文字瓦押印「佐位」	1	高崎市上野国分寺跡	群馬県教育委員会
69	"    「蘭田」	1	"	"
70	"    「佐」	1	"	"
71	"    「多」	1	"	"
72	"    「生」	1	"	"
73	"    「勢」	1	"	"
74	"    「雀」	1	"	"
75	文字瓦「山字物マ子成」	1	"	"
76	"    「山字子文麻呂」	1	"	"
77	"    「八伴氏成」	1	"	"
78	"    「八阿子麻呂」	1	"	"
79	"    「多胡郡織妻郷」	1	"	"
80	"    「勾舎人」	1	"	"
81	墨書土器「造仏」	1	"	"
82	埴塼（るつぼ）	1	"	"
83	十二神将像	1		信濃国分寺
84	平瓦	6	上田市新原田新開窯跡	丸子郷土博物館
85	坏・坏蓋（つきぶた）	2	上田市日向山窯跡	"
86	大甕片	1	"	"
87	須恵器坏	1	上田市大洞窯跡	"
88	大甕片	1	"	"
89	窯体片	1	"	"
90	平瓦	3	上田市田ノ入窯跡	"
91	須恵器坏	2	上田市原山窯跡	"
92	坏蓋	2	"	"
93	大甕片	1	"	"
94	軒平瓦	2	上田市諏訪田遺跡	"
95	丸瓦	1	"	"
96	八葉複弁蓮華文軒丸瓦	3	上田市信濃国分寺僧寺跡	信濃国分寺資料館
97	均整唐草文軒平瓦	3	"	"
98	八葉複弁蓮華文軒丸瓦	2	上田市信濃国分寺尼寺跡	"
99	均整唐草文軒平瓦	2	"	"
100	蕨手文軒丸瓦	1	信濃国分寺僧寺跡北方出土	"
101	"	2	信濃国分寺尼寺跡東門地区	"

102	均整蓮華文軒平瓦	1	信濃国分寺尼寺跡東門地区	信濃国分寺資料館
103	〃	1	信濃国分寺瓦窯跡	〃
104	〃（「更」へラ書き）	1	〃	〃
105	三重圈文軒丸瓦	1	信濃国分寺尼寺跡金堂南側	〃
106	四葉単弁蓮華文軒丸瓦	2	〃	〃
107	十二葉単弁蓮華文軒丸瓦	1	信濃国分寺尼寺跡金堂西方	〃
108	鬼瓦	2	信濃国分寺僧寺跡	〃
109	円面硯	2	〃	〃
110	鉄釘	6	〃	〃
111	緑釉陶器	1	〃	〃
112	灰釉陶器	1	〃	〃
113	壺形土器	1	〃	〃
114	瓦塔片	1	〃	〃
115	平瓦	2	〃	〃
116	丸瓦	2	〃	〃
117	文字瓦「伊」（へラ書き）	2	信濃国分寺尼寺跡	〃
118	平瓦	2	〃	〃
119	丸瓦	2	〃	〃
120	和同開珎	1	〃	〃
121	墨書土器「講院」	1	明神前遺跡(尼寺跡西側)	〃
122	〃 「舟」	1	〃	〃
123	〃 「子」	5	〃	〃
124	〃 「仲」	1	〃	〃
125	〃 「仙」	1	〃	〃
126	〃 「寶」	1	〃	〃
127	〃 「人」	1	〃	〃
128	〃 「八」	1	〃	〃
129	鉄釘・鉄滓	4	〃	〃
130	須恵器・土師器坏	4	〃	〃
131	八葉複弁蓮華文軒丸瓦	2	信濃国分寺僧寺南大門跡	上田市教育委員会
132	刻書須恵器「佐久」	2	信濃国分寺僧寺北東城跡	〃
133	〃 「井」	1	〃	〃
134	〃 「大」	2	〃	〃

## 引用参考文献

No	著者名	文献名	発行所	発行年
1	角田文衛	新修国分寺の研究第3巻東山道と北陸道	吉川弘文館	1991
2	上田市教育委員会	信濃国分寺一本編一	吉川弘文館	1974
3	山崎信二	「平城宮・京と同范の軒瓦および平城宮式軒瓦に関する基礎的考察」『古代瓦と横穴式石室の研究』	同成社	2003
4	森部夫	「古代信濃の畿内系軒瓦」『増補改訂版 日本の古代瓦』	雄山閣	2005
5	黒坂周平	東山道の実証的研究	吉川弘文館	1992
6	信濃国分寺資料館	東山道と国分寺	信濃国分寺資料館	1997
7	奈良文化財研究所	平城宮跡資料館図録	奈良文化財研究所	2004
8	八賀 晋	史跡美濃国分寺跡	大垣市教育委員会	2005
9	前沢和之・高井佳弘	史跡上野国分寺跡発掘調査報告書	群馬県教育委員会	1988
10	大金宣亮・大橋泰夫他	下野国分寺跡Ⅰ～Ⅸ	栃木県教育委員会	1985～1993
11	国分寺町教育委員会	「国指定史跡下野国分寺跡」現地説明会資料	国分寺町教育委員会	2003～2005
12	箕輪町教育委員会	大道上遺跡	箕輪町教育委員会	1996
13	上田市教育委員会	市内遺跡	上田市教育委員会	1992
14	上田市教育委員会	国分遺跡群	上田市教育委員会	2002
15	上田市教育委員会	駕籠田(築地)遺跡	上田市教育委員会	1999
16	上田市教育委員会	市内遺跡	上田市教育委員会	2006
17	上田市教育委員会	高田	上田市教育委員会	1991
18	川上 元	「信濃国分寺跡」『日本の史跡5』	同朋舎	1991
19	奈良市教育委員会	平城京・藤原京出土軒瓦型式一覧	奈良市教育委員会	1996
20	倉澤正幸	「信濃国分寺跡出土瓦の再検討一瓦当范と製作技法一」『中部高地の考古学』	長野県考古学会	1994
21	山崎信二	「平城京内出土軒瓦と信濃国分寺出土軒瓦」『古代信濃と東山道諸国の国分寺』	信濃国分寺資料館	2006
22	奈良国立文化財研究所	西陸寺発掘調査報告書	奈良国立文化財研究所	1993
23	上田市教育委員会	「史跡信濃国分寺跡国分僧寺南大門想定地発掘調査」現地説明会資料	上田市教育委員会	2004
24	信濃国分寺資料館	東国の国分寺—国家鎮護の寺々—	信濃国分寺資料館	1995
25	吉田章一郎・五十嵐幹雄他	「長野県小県郡依田村に於ける窯址の調査」『信濃』2月号	信濃史学会	1954
26	丸子町教育委員会	原山窯址	丸子町教育委員会	1986
27	塩入秀敏他	三角一三角遺跡群(諏訪田遺跡・社軍神遺跡)緊急発掘調査概報	丸子町教育委員会	1980
28	坂詰秀一	「長野県北佐久郡御牧ノ上窯址」『日本考古学年報16』	日本考古学協会	1968
29	信濃国分寺資料館	信濃の古代・中世の仏教文化と関係遺跡	信濃国分寺資料館	2005

特別展覧会開催にあたり、下記の方々のご協力、ご指導を賜りました。厚く御礼申し上げます。

#### 協力機関（五十音順）

大垣市教育委員会、大垣市歴史民俗資料館、群馬県教育委員会、財団法人とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センター、信濃国分寺、下野市教育委員会、栃木県教育委員会、栃木県立しもつけ風土記の丘資料館、奈良市教育委員会、奈良市埋蔵文化財調査センター、奈良文化財研究所、丸子郷土博物館、

#### 協力者（五十音順、敬称略）

植木茂雄、片柳嘉一郎、川上元、久保邦江、小林正、塩入法道、篠原祐一、高井佳弘、高田康成、中井公、中井正幸、西口壽生、橋本澄朗、林正憲、原田憲二郎、平塚正因、松田猛、宮崎正裕、森川実、山口耕一、山崎信二、

- 表紙写真** 左上・平城京跡西隆寺付近出土軒平瓦（信濃国分寺跡出土軒平瓦と同范と推定される。奈良市教育委員会所蔵）  
右上・信濃国分寺僧寺跡出土均整唐草文軒平瓦  
左下・美濃国分寺僧寺跡全景（大垣市教育委員会写真提供）  
右下・下野国分寺僧寺塔跡礎石出土状況（下野市教育委員会写真提供）

**裏表紙カット** 上野国分寺七重塔復元模型（群馬県教育委員会所蔵）

—新生「上田市」合併記念事業—

## 古代信濃と東山道諸国の国分寺

平成18年9月16日発行

編集発行 **上田市立信濃国分寺資料館**

〒386-0016

長野県上田市国分1125番地

電話・FAX (0268) 27-8706

E-mail:kokubunji@city.ueda.nagano.jp

URL:<http://museum.umic.ueda.nagano.jp/kokubunji/>

印刷 中澤印刷株式会社

